
勇者はいつも竜を殺す

山本 水城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者はいつも竜を殺す

【Nコード】

N7636X

【作者名】

山本 水城

【あらすじ】

俺はスケアクロウ、警官あがりのトロントの私立探偵。クリスマスも直前の冬本番、アパートのおんぼろオイルヒータがとうとういかれちゃったというのに、ゲイの大家は知らん顔を決め込んでいる。いつも昼飯に行く「フィッシャーマンズ・ワーフ」では、また自身のフライが品切れ。ダイアルアップ接続のインターネットは、とてつもなくとろくさく、スパムメールにもうんざりする毎日だ。まあいい、そんなことはいつものことだ。だが、月曜日の朝、とんでもない依頼人が、オフィスの前で俺を待ち構えていたところから、こ

とは始まった。

i n t r o d u c t i o n

バスローブの前を掻き合わせ、素早く左右の様子を窺うとアリッサ・ゴールドウィンは、夫の書斎にすべりこんだ。

後ろ手にドアを閉めたが、鍵はかけなかった。

ローブの合わせ目を気にしながら、部屋のほぼ中央に置かれているオーク製のライティングデスクへと急ぎ足で歩み寄り、デスクランプを点けた。

そして、デスクの上に置かれている夫のアタッシユケースのダイヤルキーを慣れた手つきで合わせ始める。

ロックをスライドさせると、アタッシユケースの蓋が音を立てて開いた。

眼鏡ケース。

ウェブサイトのプリントアウト。

週刊誌。

順番に中身を取り出すと、アリッサ・ゴールドウィンは、デスク横のロココ調のカウチの上に几帳面に並べ始める。

中身を、完全に元通りに戻せるようにだ。

続いて、PDAと携帯電話を取り出す。

携帯のアクセスロックを慣れた手つきで解除し、通話記録、住所録、メールの中身を手早くチェックする。

カウチの坐面一杯にアタッシユケースの中身を並べ終えた時、底の

方に、これまで見かけたことのない黒い袋があることに、アリツサは気が付いた。

バックスキンでできたその袋を手にとると、アリツサは紐を緩めた。そっと右手を中に差し入れる。

「ひっ………！」

声にならない短い悲鳴をあげ、アリツサは、袋の中身を思わず床に取り落とした。

「それ」は、毛足の長い絨毯に半ば埋もれながらも、グロテスクな姿をオレンジ色のランプの明かりの下に晒していた。

十二月二日(月) (1)

1

シーツの隙間から染み入ってくる冷気で目が醒めた。

二、三度寝返りを打って瞼ををきつく閉じてみたが、まどろみは、すっかり寒気に追いやられてしまった。

観念してベッドから体を起こす。

朝はいつも泥のような気分だ。

最近は特にそう思う。

身体を極力ベッドから出さないようにして、手近の椅子の背に投げたあるセーターに手を伸ばす。

毛布から出た腕を伝って、背中の方まで、寒気が落ちてくる。

今朝はまた、とんでもなく冷え込んでいる。

毛布を被ったまま、あちこち突っかかりながらも、俺はやっとセーターを着終わった。

着古したジーンズに脚を通すため、仕方なしにベッドから起き上がる。

「働けよ」と壁のオイルヒーターに悪態をつき、パネルを蹴飛ばしてみる。

自分の足が痛んだだけに終わった。

随分前に止まっていたのだろう、パネルはスケートリンクの表面の

ようだった。

半ば無意識に冷蔵庫から卵を一つ取り出し、コーヒーマシンの空のサーバーに入れた。

レンジの上に掛けっぱなしであるヤカンに水を汲む。

そこからコーヒーマシンのタンクにちょうど6カップ分の水を注いだ。

コーヒーマシンのスイッチをいれ、またヤカンに水を足し、レンジに戻して火を付ける。

溜息をつきながらバスルームに向う。

湯の方の蛇口を全開にし、俺は出る水が温まるのを待った。

うつすらと湯気でくもった鏡には、まだらに髭の伸びた三十男がうつっている。

左手で顎をなで上げ、そのまま寝癖で逆立った短めの髪の毛を撫で付けてみる。

どういった寝方をするとこんな髪型になるのか、俺にもよく判らない。

何度掌で頭を撫で付けてみたところで、ショートヘアのレニングレードカウボーイといった有様には、たいした効果はなかった。これもいつものことだ。

髪も髭も、煎り始めのコーヒー豆のような色だ。身分証の記載は、一応「プラチナ・ブロンド」。

物は言いようだ。

鏡をのぞきこむと、階下のゲイに「ロンドンズ・スカイ」と言われ

ているグレイがかった水色の目が、こちらを見返した。
ロンドンの空模様について、俺は特にコメントすべき事項を持ち合わせていない。

別に、そのゲイだって気象予報士という訳ではないのだ。

溜ったお湯で顔だけを洗った。シェーバーとクリームは数日前から切らしたままだった。

タオルで顔を拭いながらキッチンに戻ると、湯が沸いていた。
火を止め、棚からマグカップとティーバックを取り出す。

コーヒーマシンには6カップ分の白湯と半熟卵が出来ていた。
スイッチを切り、サーバーの湯をゆっくりシンクに空ける。

空になったサーバーに冷水を満たして卵を冷やしている間に、マグカップにティーバックを放りいれ、ヤカンの湯を注ぐ。

ミルクでも入れるかと冷蔵庫を開け、テトラパックを取り出したが、
なんとなく嫌な感じがする。

「冷蔵庫には物を入れっぱなしにしちゃいけない」って言うのは、
誰の格言だったか……。

コーヒーマシンから卵を取り出し、3分の2ほど殻をむいて齧る。
さほど、食欲があるわけではない。

塩を買ってこなければと思った。

確か、一昨日もそう思った。

兎にも角にも、ぼんやりとしている時こそ、身体に染み付いている
惰性の動作には逆らわない方がいい。

「いつもの手順」ってヤツを踏み違えたばかりに、妙な事に足を

取られてしまう。

いつも通り、焦げ茶のアップライトピアノの上に置いてある腕時計を右手首に着け、キーリングをポケットに入れた。

玄関のドアを閉める時に振り向いて、レンジの火が消えていることを確認した。

階段を降りながら、今日一本目のタバコに火をつける。

やっと意識が覚醒してくる。

最近、ますます立付の悪くなってきたフォードのフロントドアを叩きつけるように閉め、イグニッションを回した。

エンジンの回転数上がるのを待つ。

フォードとはいえ、もとは日本だが韓国だから作られたものらしい。特段の故障もなくこれまで乗ってきたが、もついい加減にあちこちガタが来ている。

十年選手のこいつを騙し騙しで発車させるのも、いつもの手順だ。

だが、どこかで何かを間違えてしまったんだろうか？

この日を境に、俺の「いつもの一日」は当分の間やってこなかった。

いつもどおり、俺とフォードは、通勤ラッシュにあたらない時間帯を選んで出発し、きっかり十七分でダイナー「フィッシャーマンズ・ワーフ」の猫の額ほどのパーキングに滑り込んだ。

店は相変わらず、パーキングの入口の段差を修理していない。
バンパーリムをこする嫌な音がする。

この街のどの車にも新品のサスペンションが付いてると思ったたら大
間違いだと「フィッツシャーマンズ・ワーフ」の店主には、事あるこ
とに主張していたのだが。

サイドミラーに目をやると、トラッシュユビンを引きずりながら「フ
イッツシャーマンズ・ワーフ」の裏口からポアが出てきたところだっ
た。

俺の車の「ゴリゴリ」が合図みたいに、毎朝決まってこのタイミン
グだ。

車から降り、ドアを叩きつけて閉めると、ポアが近づいてきた。

「おはよう、ポア」

と、ポアは俺に挨拶する。

この言い方を俺は、最初はひどく奇妙に思った。
だが、理由が分かかってしまえばどうってことはない。

ポアは自分に言われたことと他人に対して言うべきことの区別が出
来ないのだ。

そして、ポアは、いつも張り付けたように笑顔を浮かべている。

「おはよう、ポア。今朝も冷えるな」

タバコのパックを取り出しながら、俺は答える。

「吸うか？」

「ポー、ありがとう」

これも同じ公式だ。

自分が礼を言われた通りに繰り返す。

……もしくは「ポーがありがとうと云う」という意味なのかもしれない。

ポーはおずおずとタバコを銜える。

俺は火を差し出してやる。

前後左右に体をゆらし、咳くように、時折、語尾を素っ頓狂に上げながら、ポーは礼の言葉を繰り返す。

風の音の中、かすかに紙の燃える音が聞こえる。

俺たちが吐き出した煙が、背中の方に流れていく。

湖から運河に風が吹き上げてくる時間だ。冷気が鼻腔の奥に凍みる。

「仕事は忙しいか、ポー？」

半分ほど吸い終わった頃で、俺は訊ねた。

すると、突然、「ぐずぐずするな！忙しいんだぞ、ポー！」と、ポーが店の親父の声色で怒鳴りだした。

俺は一瞬、その大声に肝を冷やした。

だが、すぐに「この様に親父に怒鳴られる程忙しい」という意味なんだろうと解釈した。

しばらくの間、忙しい、忙しいと、また噛み締めるように咳きながら、ポーは揺れている。

ポーとは毎日のように、ここでこうしてタバコを吸うが、こんな調

子で互いに大して話すこともない。
ただ、吸っている間は、ポーは仕事の手をとめて、何となく俺の横に立っている。

ポーはポーなりに、俺に気を使っているのだろうか？

俺も何となく一本吸い終わるまで、立ち去る潮が見つからない。
そもそも俺もたいてい、それほど急ぐ仕事があるわけでもない。

フィルターまで、あと1センチのところまで、きっかり大事そうに吸い終わると、ポーは吸殻を足で潰して几帳面に火を消し、自分の薄汚れたエプロンのポケットに入れた。

「今日、スケアクロウのランチは？」

「俺が昼飯をどうするかって？ さあ、まだ決めちゃいないな」

ランチランチ……。

相変わらず落ち着きなく前後左右に揺れながらも、ポーは手を腰のところまで曲げ、おいでおいでのしぐさをして見せる。

「ごみ捨てにいつまでかかっているんだ、ポー。とっとと戻って手伝え！」

裏口から「フィッシャーマンズ・ワーフ」の親爺が怒鳴りつけてきた。

抱えているプラスチック製の箱には、何やら赤黒いものが、大量に入っている。

ポーは自分の背丈ほどもあるトラッシュユビンを引きずりながら、慌てて店に戻っていった。

俺は助手席のドアを開け、置いてあった新聞を取って、脇に抱えた。ほとんどフィルターだけになったタバコを銜えたまま、パーキングを挟んで店とは反対側にある建物へと歩き出した。

前に一度、ポーの前で吸い終わってしまった時。

俺が地面に打っちゃっておいた吸殻を、ポーが摘まみ上げて自分の吸殻と一緒に、前掛けのポケットに入れたことがあった。

それ以来、俺はポーの前では吸殻を捨てないようにしている。

パーキングに面しているのは、オフィスの建物の裏側になる。

俺は正面の玄関へと回った。

このあたりは、割合古い建築物が残っている地域だ。

言葉を変えれば、おんぼろのビルディングが取り残されている一帯とも言える。

その中では、俺のオフィスは家賃のわりにましな方だった。

そんなうらぶれ方も、それなりに役立つ事があるらしく、この辺りでは、たまに映画撮影が行われている。

シカゴの下町であったり、ニュージャージーでのイタリアン・マフイア達の銃撃戦のシーンなんていうのに、うってつけだったりするらしい。

最近では、アンダーシャツ姿の刑事がテロリストと戦ったりする映画に使われていたのが、特に有名だ。

オフィスのビルの正面玄関には、ちょっととした車寄せが付いている。かつてはこの建物も、少しはまともな役目を果たしていたらしいことが僅かにうかがえる。

その玄関を入って右側に、各部屋の郵便受けの箱が並んでいる。俺は箱の数字錠をまわし、扉を開ける。

郵便受けの扉には、小さな黒いプラスチックの板が貼られていて、白の活字でこう刻印してある。

308 リード&アソシエイト探偵事務所

これが俺のオフィスで、俺は私立探偵をやっている。だが、俺はリードではない。

オフィスの名前にあるジェイク・リードは、一年半前に死んだ。

俺はオフィスの共同経営者だった。

つまり、「アソシエイト」の方だ。リードの遺言で、奴の分の経営権は俺が相続した。

だから、今やこのオフィスのオーナーは、俺一人ということだ。

リードは、俺を「スケアクロウ」と呼んでいた。知り合いはたいいてい、俺をそう呼ぶ。ポーもだ。

この名前に、特に意味なんか無い。

十二月二日(月) (1) (後書き)

こんにちは。山本です。
しよっぱなからエクスキューズを。

むかし、わたしが小中学生の頃に流行していたマンガに、野間美由紀さんの『パズルゲーム はいすくーる』というのがありました。野間さんのお好きな様々なミステリーの要素がぎゅっと詰まったり、ダブルな作品です。

舞台となっっている葉蔓高校がすてきで、そんな高校生活に憧れたりもしていました。

その、『パズル……』の一番最初の頃の(媒体としては花とゆめコミックスだったと)単行本で、本編の末尾に作者サンのイラスト付エッセイみたいなものが載っていました。

もう、内容はうるおぼえなのですが、

「卵のゆで加減って難しいですよね? どうやらコーヒーマーカーで半熟卵が上手にできるらしいです。やってみたことはないけど、ホントかな?」

というような内容でした。

そして、『『ハードボイルド』じゃなくて、コーヒーマーカーで半熟卵を作るような探偵さんの話とか、いいなあ……」

というコメントと、卵を持った探偵らしきおっさんのイラストが描かれていたと思います。

それを読んで、子どもだった私は、
「それ読みたい。せんせーいつ描いてくれるのかな?」
と結構、楽しみにしておりました。

しかし、わたしが見逃しているのかもしれないですが。なかなかコ

「ヒーメーカで半熟卵をゆでる探偵の話は、現われず……。10年以上待ちかねた末、「じゃあ、自分で書くわー」と思い（なんと、厚かましい子！）、書き始めたのが、この話の元々でした。

コーヒーが好き過ぎて、コーヒーメーカーは卵をゆでるための道具にしかしていない（ネルドリップ派だから）、のっぽでヒネてても優しく、ちょっと疲れた感じの二十代後半から三十代の、ブロンドでハンサムなのに、妙にしがない探偵さん。それが、寒い街に住んで、なぜかゲイにモテモテ。みたいなイメージで書き始めたわけです。

これが、なかなか上手くまとまらず。卵をゆでただけで、スケアクロウ、5年冬眠……。さらに5年後、プロットを練って書き始めたものの、あまりに長い話となり、完結までに時間がかかり……。そして、書きためたものを、なるうサイトに掲載し始め、今に至る。というわけです。

舞台設定は、その時から止まったままなので、スケアクロウのネット環境は、とんでもないことになっているワケです。そして、まだ、場末のレストランではカウンターではタバコが吸えるし、スタバも街に現れ始めたところという。つまり、2000年、2001年くらいの話ということになります。

野間先生のエッセイを知っている方が、たまたまこんな所にあるネット小説を目にするなんてことも「まずない」とは思いますが、スケアクロウの卵ゆでの元ネタは、そんなところにあったりするので、一応メモとして書いておいたという次第でございます……。

十二月二日(月) (2)

2

一日あたりタバコ十本の喫煙による健康被害を埋め合わせるために、俺は三階の事務所までは階段を使うことにしている。これで息があがるようになって来たら、禁煙の良い契機にもなるというわけだ。

ちなみに、膝が震えるようになってきたら、毎日八キロのジョギングをしようと考えている。

もちろん、それはトロントの日中平均気温が摂氏十五度を越えるようになってからの話だ。

膝も震えず、なんとか三階のエレベーターホールまでたどり着いた時、俺の視界の左端に、何か巨大な影がちらついた。

向かいの通信販売の会社が、先週あわただしく引き払っていったことが、ふと思いつかれる。

廊下に家具でも捨ててしまったのかと、苦々しい気持ちで、舌打ちした瞬間、粗大ごみが動いた。

「ちょっと！ あなたがリードさん？」

黄色いでかい鳥が出てくる子ども向けテレビ番組で、クッキー食ってる怪獣が、中年女性になったらこんな感じだろうか。その甲高い声が、俺に向って散弾のように飛んできた。

彼女は銀色の狐皮のコートを翻しながら、十二番径のスラッグ弾のように、俺に近づいてくる。

あの巨体を覆う為に、一体何十匹の獣が犠牲となったのだろうか。

フィルターだけになったタバコが、俺の口からぼとりと床に落ちる。

どのように自分の身を処しているのか咄嗟には計りかね、俺はホルの真ん中に立ち尽くしていた。

その間にも粗大ゴミは、ヒステリック・ヴォイスを連射させて、ホールの方に駆け寄ってくる。

「一体、何時になったら事務所は開くの？ 『ホームページ』には午前九時からって書いてあったわよ。一体全体、今何時だと思ってるの?! もう十時よ!」

……そう、ラッシュに掛からない様に、俺は毎朝時間をみはからって家を出ている。

かなり遅めに。

「申し訳ない、マダム。いや、ミス。営業時間を少々変更しまして……」

「それなら、ちゃんと『ホームページ』書き換えておいて頂戴! こっちはこれから仕事があるのよ!」

ホームページ……。

そんなものもあつた。そういえば。

事務所の開設時に、ウェブサイトを立ち上げたがったのはリードだった。

内容は全部リードが考え、俺はファイルを作らされた。

リードは流行には敏感だったが、コンピュータの扱いはからきしかったのだ。

「お前はやっぱり若いな、頼んだぞ、コンピュータ少年」とか何とか云われて。

まったくの家内制手工業バージョンだ。

「とにかく、早く事務所開けて頂戴。まったく」

しゃべる粗大ゴミ、もとい、デブばばあは、至近距離では凶器になりかねないような金切り声をあげ続けている。

こいつを事務所に通さなくてはならんのだろうか、俺は。

床に落としてしまった吸殻を拾い、ジャケットのポケットにそれを突っ込むと、キーを取り出した。

巨大なクッキー・モンスター。

あるいは、エスキモー・ポイントの土産物屋辺りに飾ってあるトドの剥製のようなデブばばあとオフィスのドアとの間に、俺は決死の覚悟で身体を入れ込み、鍵を差し込んだ。

ドアとばばあとの間で圧死しそうになる。

俺は焦って鍵を回す。

ドアが空いた途端、ばばあの腹に突き飛ばされるようにして、俺は部屋の中に転がり込んだ。

慣性の法則には逆らわないことにして、そのまま転がるように進み、突き当たりのデスクの後ろ、窓の下にあるオイルヒーターのコックを捻った。

もはやその場で力尽きんとするところだったが、俺は何とか踏みとどまった。

そして、一応礼儀として、ばばあにはいささかサイズが小さめと思われたが、この部屋では唯一のアームチェアを勧めた。

コートを脱いで、俺は気を取り直し、コーヒーマシンにフィルターをセットした。

すると、すかさずデブばばあが金切り声をあげた。

「私、時間がないのよ！ コーヒーなんかいいわ、まったく！」

回収時間より10分早く回ってきたごみ収集車に対するクレーム電話のような横暴さだった。

前言撤回。

くだんのクッキー好きの緑の怪物がいくら老けても、ここまで厭味にはなれないだろう。

ばばあにコーヒーを出してやりたいなどは、更々思っていないが、俺自身が「気付け」を必要としている。

ペーパーフィルターを取り出して折り、コーヒーマシンにセットする。

棚から、真新しいパックを取り出した。

スマートラ産の最高級のマンデリンだ。

中身は既に挽いてあったが、しっかりとパウチされている。

その新しいパツクの封を切ると、痺れるような至福の芳香が広がった。

この素晴らしいマンデルリンのドリップに関しては、俺は甚だ本意ではあったがフィリップスのコーヒーマシンに一任する事にした。ネルで淹れたら最高なのだが……。

俺はデブばあの前に曲げ木のスツールを置き、そこに座った。そして、なんとか言葉を絞り出そうと努力した。

「それで、今日はどのような……」

デブばあは、額にファンデーションの皺がくつきりと寄るくらい、両眉をひそめてみせた。

「あなたね。一体、どういうつもりなの、自分の名前フルネームぐらい先にいいなさいな。一体全体。名刺はないの?！」

そういえば。

小学校三年生の時、こんな「ばあ」がいた。生徒の描いた絵を、何だかんだといいながら、みんな紫色や橙色に塗りたくってしまふ類の美術教師だった。

あいつの口癖も、「一体全体、まったく」だった。

……一体全体、なんて賤の悪い子なんですよ。この子は！ とかなんとか。

俺は立ち上り、デスクの引出しを探って、下の方から、まだ割合にきれいな状態の名刺を取り出してきた。

デブはばあに名刺をわたすと、俺はテーブルの上のメモ用紙を一枚剥がし、ジャケットからペンを取り出した。

今すぐに、熱いコーヒーが飲みたかった、たまらなく。

だが、間抜けなフィリップスはまだ、ごぼごぼと音をたてながら仕事 중이다。

部屋がだいぶ温まってきたことに気がついて、俺はジャケットも脱いだ。

程なく、マンデリンの香りの他に、何か別の臭いが漂っていることに気がついた。

ヒーターの効きがよくなってくるにしたがって、それは猛烈になってくる。

俺は思わず、ばあに尋ねた。

「なにか、その、つけてらっしゃいますか？ ミス……」

「ゴールドウィンよ、アリッサ・ゴールドウィン」

……アリッサ？ って。

そんな可愛らしい名前のつく図体かよ？！

心の中では激しく悪態をついたが、口には出せず、俺はただ唾を飲み込んだ。

「素敵でしょ？ チェコ産のラベンダーよ。無農薬の「最高級」品なの。わたしのお気に入りに入り！ やっぱ自然のものが一番ね」

モノは自然なのかも知れないが。

装着分量は非常に不自然としか思えなかった。ラベンダー畑、三ヘクタール分はぶつかぶつてきたらしい。

俺の「最高級」マンデリンの芳香は、ラベンダーに敗北しつつあった。

三ヘクタールのラベンダー畑についても、ノーコメントのまま、俺は席を立った。

そして、プラスチックカップにコーヒーを注ぎ、ひとつをばあの前に置いた。

俺はスツールに腰かけながら、自分のカップに口をつける。

ドリップにおいて、ペーパーフィルターとコーヒーマシンを利用したという失点にもかかわらず、素晴らしい香りが喉から鼻腔に抜けた。

思わず溜息がこぼれる。

しかし、デブばああの金切り声によって、俺は再び我に返った。

「あなた、リードさんじゃないのね？」

矯めつ眇めつ、俺が出した名刺を見ながら「責任者を出せ」と、言わんばかりの口調だった。

「リードはいません。今は俺だけです」

「あら、そうなの？ あなた私立探偵の登録は、ちゃんとしてあるんでしょっね」

不満げな顔つきで、ばあは目の前に置かれたカップをとり上げた。

小指は立てるな！ ばばあ。
心の中で叫びながらも、俺は話を続けた。

「……非常に申しあげにくいのですが、ミズ・ゴールドウィン。当
事務所は、現在基本的に……その。個人からの依頼は、お受けして
おりませんで」

というか、こんなマイナーな個人事務所に飛び込みで来る客はなん
か、まずいない。

実際、最近俺の取り扱っている仕事の殆どは、大手探偵事務所から
の下請だ。

「お客を選べるようなオフィスには、見えないけど？」
デブばあは小指を立ててカップを持ったまま、大きく右眉を上げ
た。

主に目尻の皺を隠す用途で、一定年齢以上の女性によく用いられて
いる大振りのフレームの眼鏡。
その色付きレンズが、ばばあの鼻息でかすかに曇った。

「……うちの事務所の事はどちらで？ ウェブサイトをご覧になっ
たとおっしゃいましたか？」
俺は話を少し変えた。

「ええ、でも元々はお隣で聞いたのよ。あら、私、まだきちんと自
己紹介もしてなかったわ。アリッサ・ゴードウィン、トロント市近
隣サービス局のソーシャルワーカーですの」

黒いエナメル皮のハンドバックをまさぐり、プラスチックカードの
IDを取りだすと俺に見せた。

ああ……。

「お隣」ってのは、「フィッシャーマンズ・ワーフ」の事か。

そして、俺に二の句を継がせぬタイミングで、デブばああは言った。

「ここは、料金表ってないのかしら？」

いや……俺は、まだ引き受けたも、なんとも。

「私の主人についてなんですの」

デブばああは、またハンドバックに右手を突っ込むと、何やら取り出した。

「これ。まず、ご覧になって頂戴！」

勿体ぶった口調で、ばああは右手で一食品保存用のチャック付きプラスチック・バック《ジップロック》をかかげた。

中には、ナマコぐらいの大きさの黒っぽい物体が入っている。

しばしの間の沈黙が流れた。

しかし、俺が唾を飲み込んだ音で、それは途切れた。

「……プラスチックとラテックスで出来た男性性器の模型、のように見えますが」

俺はやっつとのことですら口にした。

「そうなんですのよ、この『ヴァイヴレータ』、一体、どこにあっ

たとお思い?!」

そんなこと。

俺が知るわけがないだろう。

相変わらず、俺の返事を待つつもりも、聞くつもりもない様子で、
ばばあは続けた。

「先週、主人のアタツシユケースを片づけてたんですの」

ケースの「中を」だろ? 正確には。

しかも、それは「片付ける」とは言わない。

「盗み見する」と言うのだ。

「そしたら、こんなものが!」

ああ、何ておぞましい、とか何とか言いながら、ばばあはそれをテーブルの上に置いた。

俺は咄嗟に、自分のマンデリンを脇に退けた。
なるべく、遠く。テーブルの端のほうに。

すると、アリッサ「デブばばあ・ゴールドウインの目は、色付きレ
ンズの奥で嫌らしく笑った。

「あら、まさか、あなたこついうものを初めて見るって訳じゃない
でしょ?」

ここまでエゲつないのは、初めて見るよ……。

俺は心の中でひとりごち、赤面しそうになるのをこらえていた。

ジップロックに入っていた物は、単に「ペニスの代用品」といった

範疇を越えていた。

直径はどう見ても、3センチ以上はあったし、側面には、シヨッキングピンクや蛍光グリーンのイボが、大量に付着していた。

亀頭……人体で言えば、だが……の部分にぐるりと一周、キャタピラのようなものがとりつけてあって、それがデイジーの花びらのように広がることにより、直径を更にに拡大できるようになっている。

付け根、もちろん、人体であればだが……の方には、コードが伸びていて、その端にはコントローラーのような物が付いていた。

「ええっと、ミセス・ゴールドウィン。ご主人のビジネスバックに、こちらが入っていたと。それで一体、ここの事務所にどうしると」

俺は、半分やけになって問い返し、カップのマンデリンを飲み干した。

「だから、こういった『モノ』を、主人が、どこで、どういった相手に使っているか、それを探して欲しいんじゃないの！」

「……その相手は、ええ、あなたではない、と」

「んまあ、失礼な。どういっ了見なんです。あなた、私がそんな人間に見えますの……！」

……というか、あந்தあの旦那は「そんな人間」なんじゃないのか？

まあ、このばあの場合、どこにどう利用するか、探し当てるのが色々大変そうではあるが。

いや、考えるだに気分が悪い。

「つまり、ご主人の素行調査をしろってことですか？」
二杯目のマンデリンを注ぐべく、コーヒーマシーバーを手にし、俺は何とかこの状況を收拾しようと言葉を挟んだ。

「そうよ。そして、これを使ったのが誰か『DNA鑑定』して頂きたいの」

……か、鑑定って？

「ええ、ミセス・ゴールドウィン。これをあなたが発見されたのが先週と仰いましたか。ご主人は、もう紛失に気が付いているのでは？ いつそ、ご自分で本人にお尋ねに……」
俺がこう提案すると、デブはあは、今度は口を窄めながら、まるで子どもに言い聞かせるように囁いた。

「すり替えたのが先週で、見つけたのはもっと前よ。そのまま持ち出したら主人にバレるに決まってるでしょ？ だから、すり替えたのよ、ちゃんと。これは、そうね……いわば『使用済み』の方よ。こういうものがあれば、できるんでしょう？ 鑑定」

……論点が、ずれている。

「同じ物見つけるのに、ちょっと時間かかったわ」

俺には良く分からない。

どこで、どうやったらこんなモノと「同じ」物を見つけて来られるというのか。

そもそも、何故そこまでしてすりかえる必要が？

浮気相手を見付けたいだけなのなら、そんな鑑定をする必要性など、どこにもないのだが。

「鑑定、とおっしゃいますが。ミズ。身体の一部もしくは粘膜や分泌物の一部を鑑定するとしても、それと照らし合わせるべき標本が必要になるんです、つまり……」

鑑定鑑定と主張するばあに、そもそもDNA鑑定つてものが、どんなもので、何の為に行うのかって事を説明しようと、俺は努力してみた。

「その、ヴァイブ……からですね、採取したものの他に、比較したい相手から採取した標本が必要なんです。比較対象となる人間と調査本体の標本が同一人物であるかとか、同一人物でありえない、とかそういうことをチェックするのが鑑定という……」

ばあは、俺の説明を遮り、すかさずこう言った。

「で、鑑定の料金表は？ あるの？」

俺はさらに努力を続けてみた。

「鑑定するには、比較したい相手の標本を手に入れる必要があるんです。たとえば、あんたの旦那の唾とか、浮気相手のフケとか。そういうものがいるんです」

「ですから。それを調べてほしいって、さっきから言ってるんじゃないありませんの！ 浮気調査なんだから」

デブばあは、また、厭味ったらしく、俺の頭の天辺から爪先まで

眺め回しながら叫んだ。

だめだ。

まったく話にならない……。

俺は思わずため息をつき、それ以上の説明は諦めた。

そもそもトドには、人間の言語は通用しないのだ。

英語という言語が論理性に乏しいと言うわけでも、俺のコミュニケーション能力に問題があるというわけでもない。

「DNA鑑定は比較する相手の数で金額が決まります。調査本体のサンプル作成料に対して、相手のサンプル作成料と比較検査費用に人数を掛けて、それに、付加価値税……」

素直に料金の説明をする事にして、俺はふたたび曲げ木のスツールから立ち上がった。

そして、壁際に置いてあるリードの書類キャビネットを開き、中のファイルの背文字を左手で順になぞっていった。

リードがいた頃は、下請け以外の仕事も多少は扱っていたから、科学鑑定を専門に扱っている業者ともやり取りがあった。

超大手事務所に限って言えば、まれに自前のラボを抱える事もあるようだ。大抵の事務所は、そういった業者に外注に出す。

例えば。

うちの事務所で受けてた依頼がどんなものかと言つと……。

いきなりブラジルから現れたガキに遺産の取り分を要求されて、パニックに陥った相続争い中の家族が、そのガキが本当に死んだ旦那

ガリオで浮気した時に出来た子供かを確かめると大騒ぎをして駆け込んできた、といった感じで始まる。

簡単そうな調査に見えるって？ とんでもない。

まず、死んじまった旦那の標本を取ってくるのが難儀だ。

墓の改葬許可書を取るのは時間もかかるし、面倒だ。

よって、ひたすら、旦那の遺品を捜すわけだ。

それこそ自分の尻の穴に突っ込んだヴァイヴでもあれば万々歳なんだが……。

まあ、下着からから何から、持ち物を引っ掻き回して「何か」付いてないか探す。

一方の「ガキ」のほうも、やっかいだったりする。

最近では頭のいいヤツが多くて、基本的に標本採取の同意書には、サインを渋る。

特に、確信犯でカタリをやっている場合は、標本を採取されることを見越して、コーラの缶からタバコのフィルターまで気を付けて始末をしたりして、まったく手に負えない。

リードは基本的にマメなヤツではなかった。

俺もそうだが、まあ、リードよりはました。

ヤツは「いつかはやる」と言い続けてきたキャビネットの中を、すべて整理し終える前に死んでしまった。

それ以後、そういった余分なことに割く時間とエネルギーは、俺にはなかったから、このキャビネットは片付かないままなのだ。

そんなことを思い出していると、キャビネットの二段目から、ラボ

に外注に出す際の金額表がファイルされているが見つかった。

もう何年も前のファイルだった。

値上がり分が五パーセント位で、客に対する手数料分で十パーセントは割り増しした上で、タックスを掛けて……。

俺は頭で計算しながら、そのファイルを繰り、ばばあに向かって適当な金額を読み上げてやった。

いざ、俺が滔々と金額の説明を始めると、ばばあはさも面倒くさそうに手を振り、それを遮った。

「ああ、もういいわ、わたし、時間がないのよ！」

ばばあはこう言って、アームチェアから立ち上がった。

「私、ちゃんと、他所の見積もりも取りますからね、ぼったりしたら承知しないわよ……！」

こうおらぶと、引ったくるようにハンドバックを手に取って、アリス・ゴールドウィンはドアへと向かって歩き出した。

俺はまだ何も引き受けちゃいないというのに、だ。

言いたいことだけ言い放ち、時間が無いと帰ろうとするトドのような女を、俺は辛うじておしとどめた。

やっとのことで彼女のIDのコピーを取り、旦那の名前と住所、彼女の携帯の番号を聞き出してメモを取る。

そして、これが最大の難関であったが、初回の依頼時に規定で徴収している調査着し金を支払いを求め、振込を確認次第、調査に着手する旨と、着し金は最終的な調査費用と相殺する旨、個人情報保護誓約等を印刷した依頼用紙に、何とかサインをさせた。

途切れることなく金切り声で文句を言いながら、ドアを叩きつけるようにしてアリッサが事務所を出て行くと、しばしの残響の後、やっと事務所に静寂が訪れた。

靴音が遠ざかって行き、表の道路からドアを開け閉めする音がした。そして、エンジン音が遠のいていく。

ふと見ると、テーブルの上に、例の蛍光色イボつき極太黒色ペニス入りのジップロックが置き去りにされている。

……あのばばあ。

どうあってもこれを「鑑定」させたいのか?!

こんな風に、まるで避けがたい天災のように、アリッサ・ゴールドウインは、俺の事務所にやってきたのだった。

十二月二日(月) (3)

3

メールチェックを終え、すっかり煮詰まってしまったマンデリンの最後の一杯をカップに注いだ時には、一時半を回っていた。

回線を切断する前に、警告メッセージが出る。

「今すぐ、ウイルスチェッカーのアップデートをしますか？」

俺は「後で」をクリックして、続行した。

この不毛な手順を、かれこれもう半年は繰り返している……。

ジャンクメールの仕分けには、どうしようもなくうんざりさせられるのだが。

結局、どうやったってスパムメールは弾き切れないものだし、だいたい、アップデート版というやつは、結構な値段がするのだ、実際のところ。

今日の四本目のタバコに火をつけると、軽く伸びをして、俺はオフイスを出た。

階段を降り、裏口から『フィッシャー・マンズ・ワーフ』のパーキングに出る。

日差しの明るさに反して、まだ風は冷たいままだ。

ポケットに両手をつっ込みながら、急ぎ足でパーキングを突っ切り、

俺は『フィッツシャーマンズ・ワーフ』の玄関に向かった。

バネの軋んだオーク調のスイングドアを肩で押し開けた。
ドアの取手の真鍮は、雨風に晒され、すっかり手擦れている。

店の中の空気は暖かく、バターの匂いが漂っていた。

二、三人の客が奥のボックス席に座って、『フィッツシャーマンズ・ワーフ名物』煮立った酸っぱい食後のコーヒーを飲んでいる。

両手をポケットに入れたまま、テーブルを拭いていた親父に、右肩をあげて挨拶した。

親父はかすかに頷いて、俺に答えた。

俺はバーカウンターの左端のスツールに座り、隅に積んである灰皿を取ると、短くなった四本目を押し付けた。

そして、ふと思いついて、ジャケットのポケットに入っていた吸い殻もそこに突っ込む。

「何にするんだ？」

背後から、これ以上ないというほど突っけんどんな声を掛けられる。
親父は、両手と両手首に汚れた皿を載せていた。

「クラムチャウダー、あと白身の魚」
五本目に火をつけながら、俺は答えた。

「魚はもうないね。こんな時間に来たって」
親父はカウンターの向こうに回り、シンクに洗い物をぶちこんでいる。

フィッシュヤーマンズ・ワーフの親父は、小柄だが、がっしりとした体格だ。額から頭頂にかけては、すっかり禿上がっており、耳の横あたりからうなじにかけて、黒々とツヤのある縮れ毛が生えている。眉も太く、口髭を蓄えており、いつ見ても肌の色艶がよい。

俺より随分と年上だろうが、俺の数倍は「精力的」と言った感じだ。いつもシャツを腕まくりしていて、右肘のあたりに、飾り文字のインシャルの入れ墨が見える。元船員つてところだと踏んでいるが、俺は親父の事については、あまり知らない。

「じゃあ、何かあるもの」

……いつもながら、不毛なやりとりだ。

俺はここで、フィッシュヤーマンズ・ワーフ目当ての物が食べられたことなどなかった。

親父は無言で、スープポウルに入ったチャウダーと匙を、目の前のカウンターに置いた。猛烈に熱そうだ。

沸騰して、泡立っているのではないだろうか。

俺は吸いかけの五本目の火を消し、匙でポウルの中をかき回しながら訊ねた。

「ポ―は？」

「あいつは飯の時間だ。融通のきかんヤツだからな」

親父はフライパンを持ったまま振り返り、吐き捨てるように答えた。

「どんなに店が立て込んでいたってお構いなしだ！ 一時十五分に

なったら必ず飯にしないと、騒ぎ出して使いものになりゃしない」

「『ランチは一時十五分』だとさ……」と両手を振り上げて繰り返す。

親父は相当おかんむりのようだ。珍しく、今日は客の入りが良かったということか。

俺は匙に掬ったチャウダーを、注意深く口に運ぶ。

なんとか飲み込める程度には冷めてきたようだ。黙々とチャウダーを匙で掬い、口へ運んだ。

ボウルが空になったところで、俺は親父に尋ねた。

「ところで。この店は、売れない探偵事務所への仕事の斡旋も始めたのか？」

親父は器用に片眉だけ引き上げてみせる。

そして、返事の代わりに黙ったまま上目遣いで、俺を見た。

「今朝、事務所に市のソーシャルワーカーが来た。ここで聞いたとさ」

俺は続けた。

親父は鼻で笑いながら、「お前さんのとこみたいに左前じゃ『社会保障』が必要かと思ってな」と言い返す。

親父は、大皿に何か盛りつけ始めた。

「そいつは実際、俺のせいじゃあない。あのアラスカのオットセイみたいなおばちゃん came たんだろ？ スケアクロウ」

俺は同意の印に、目線で僅かに頷いてみせる。

「あのオットセイは、ポーのことで、ここのところ何度か店に来てたんだ。それで『隣の建物の玄関にプレートの出ている探偵事務所って言うのは、どうなんだ』って俺に聞くのさ。そしたらポーが、お前の事をいい人だとか、そんな様な事を喋くっちゃまったのさ」

「ポーの紹介だっていうのか?! そいつはなんとも……有難いね」俺の皮肉に対して、「そうだろうとも、毎朝、ポーにタバコを恵んで宣伝したのがよかつたんだだろうよ」と切り返し、親父は手にした大皿を、俺の前に置いた。

「……こいつは一体、何だ?」

出された皿には、パセリとコショウがかかった茹でジャガイモという付け合せのほかに、辛子色のソースのかかった白っぽい料理が乗っていた。

「ザリガニのボイルに、オニオンマスタードソースがかかってる。今日の晩のメニューだが、特別に先に出してやる」

ザリガニ? ザリガニだって……?!

「クラムチャウダーを二杯頼んでおけばよかった」俺は思わず呟いた。

「ああ? 何がどうしたって?」

親父は、何を言ってるのかまるで判らないと言っ顔だ。

「だから、俺はザリガニは食わない……悪いが」

親父は、お前さんには呆れたよという表情を満面に浮かべると、半ば怒鳴るように言った。

「何をいつてるんだ、ザリガニはごく一般的な食い物だぞ。ロブスターやクラブと同じようなもんだ。つべこべ言わずに食ってみろ。全く」

しかし、付け合せのジャガイモだけを食べ終わると、コーヒーもそこそこに俺は『フィッツシャーマンズ・ワーフ』から退散した。

あの『ザリガニのボイル・オニオンマスタードソースがけ』が、親父の得意メニューらしいことは、俺にも察しがつく。

メインの料理にまるで手が付けられていない皿を非難がましい様子で下げた親父と、あのまま顔を合わせ続けるのは、あまりにも気まぐらだった。

吸いかけの五本目を、火もつけないまま銜え、俺は急ぎ足でオフィスに戻って行った。

俺の両親は、ザリガニが好きだ。

スウェーデンの人間は、大概そうだと聞いている。

事実、彼らは、自分の国のザリガニだけじゃ足りなくて、アジアやこの西半球からもザリガニを輸入しては、熱心に消費に励んでいる。ずっと昔、たしか四、五歳の頃。

夏にスウェーデンの叔母の家を訪ねたことがあった。

叔母は、写真でしか見たことのなかった外国生まれの甥っ子に逢え

て大喜びで、随分と、俺に親切にしてくれた。

夏も終わりが近づき、俺達の帰国が迫った時、叔母の家の庭では、かの国の晩夏の風物詩である『クレフトフィーヴァー』^{ザリガニ・パーティー}が行われた。

時刻から言えば、随分と夜も遅かったのだろうと思う。

しかし、庭に下げられた月の顔のランタンには火をともしする必要など全くないほど、日差しはまだ明るかった。

白い湯気の中、山盛りのザリガニ。

皆、競って自分の皿にザリガニを取り分けると、殻を剥いで食べ始めた。

茹って赤黒くなり、大量に積み上がっているザリガニ……。

その様子は、子どもの俺にはあまりにもグロテスクに思えた。

皆が一斉に食べ始めても、俺は手を伸ばすことが出来ず、ただ、じつとテーブルクロスของ ギンガムチェックの升目を数えていた。

叔母は、俺の皿に幾つかのザリガニを取り分けると、一つ二つ、親切にも殻を剥がしてくれようとした。

俺は、助けを求めて母親をみつめた。

……無駄だとは知りながら。

母親はシュナップスのグラスを片手に、夢中になってザリガニに取り組んでいる最中だった。

やがて、彼女は俺の視線に気がつきはしたものの、「このおかしなな子は、どうしてこんな美味しい物に手を付けようとしなのかしら」とでも言いたげな、苛立ち混じりの非難がましい視線を、ちらりと俺に返したただけだった。

叔母は、さらにもう幾つかのザリガニの殻を剥がして俺によこすと嬉しそうに微笑んだ。

このような状況において、周囲に何を訴えても無駄であるどころか、逆効果でさえある……。

そういつた真理を、その年齢としの俺は、とうに悟っていた。

一人で耐えるしかないのだと……。

叔母が皿に盛ってくれたザリガニだけは、かろうじて口に押し込み飲み込んだ。

この楽しいザリガニ・パーティーから目立たないように席を外せるまで、しばらくの間、俺はただ堪えて待った。口の中に泥のような味がいつまでも残っていた。

そして、タイミングを見計うと、急いで裏庭に回り、花壇で見事に咲いていたトケイソウの根元に激しく吐いた。

そこは、夢のように美しいスモーランド地方の八月の庭だった。

風が植物の瑞々しい香りや湿った土の匂いを運んで、鼻腔をくすぐった。

パーティーの楽しげな談笑の声を遠く聞き、涙と鼻水を流して嘔吐しながら、苦しく、寂しく、そして冷め切った気持ちでいたのを覚えてる。

今にして思えば、これは、子ども時代の他愛のない、それどころか、

むしろ滑稽でさえある思い出のひとつなのだ。

だが、この話を誰かにする気には、俺はいまだになれなかった。

それが何故だかは、自分でもよく判らないのだが。

十二月二日(月) (4)

4

事務所に戻ると、留守電のメッセージランプが点滅していた。ノースウインド調査会社からで、報告を催促する電話だった。

俺はコンピュータのロックを外しながら、ノースウインドに折り返し電話を入れる。

担当は留守だったが、セクレタリーが セクレタリー！ まったく、羨ましいもんだ アポイントの時間を設定してくれた。

今日、午後五時、これまでに集めた証拠を一旦、持参する事にして電話を置いた。

42

これで、今年の仕事も大体片付いた感があった。今、さほど急ぎの仕事があるわけではない。

出来れば、このトロントの寒空から飛び出し、暖かい海辺にでも二週間ばかり出かけ、のんびりしてみたかった。

だが、おんぼろフォードの買い換えという緊急性を要する問題がある。

結局、俺はフォード買い替えの予算を増やす方を選択した。

冬はどうせまた、半年後にやってくるのだから、避寒のチャンスも、また巡る。

だが、その時まで車ファクティブがもつかについては、実際、大変に心もとない。無論、暖房のイカれたアパートで、この冬いっぱい、俺が「もつ」

かどうかが、本当は一番怪しいところかもしれない。

とりあえず、「デブばあ」の旦那アレックス・ゴールドウィンが所有する会社名を、サーチエンジンにぶち込んでみる。

一分以上は、ゆうに経過したかと思われた。

真っ白な画面が数分割された。更に画像表示のアイコンが点滅しながら、また一分経過。

重い、重すぎる……。

トロントのADSLやケーブルテレビ普及率を考えたことがないのか？ この会社。

やっと現れてきたのは、ゴテゴテと画像を多用したトップページ。この分だと音も鳴っていそうだ。

……著作権切れのクラシックか、安っぽいオリジナルのMIDI。一体、どこの会社に発注すると、ここまでセンスのないウェブサイトに出来るのだ？

あらかじめPCのスピーカを切っておくという習慣は、こういうサイトに踏み込んだ時に後悔しない為には、相当に重要だ。

全画面の表示が完了する前に、マウスポインターを動かし、俺は画面上で反応している箇所をざっと探った。

そして、勘で一カ所をクリックする。

かなり古典的手法だが、ダイアルアップ・ユーザーの知恵、その1つとところだ。

ともかく、この画像地獄を抜け出さなくては……。

得られる情報の質と量から換算すると、甚だ不当なバイト数を消費していると思えないゴールドウインの会社のウェブサイトから、命からがら生還した俺が獲得した情報は、以下のとおりだ。

社長の名前は、アレックス・ゴールドウイン、どこかの優男俳優によく似た名前だ。

一九五二年生、四十八歳。ヨーク大学卒。

一九七三年にノース・トロント市（当時）にスミス&ゴールドウイン・ステーショナリーオフィス《文房具店》を開店。

一九八〇年代に不動産業子会社ゴールドウイン・リアルエステート設立。

一九九〇年代に入り、スミス&ゴールドウインステーショナリーオフィスは、ファックスやEメールで受注し、オフィス用品の宅配を行う業務を主体として成長。年商八千二百万加ドル。

右斜四十五度からの顔写真が掲載されていた。

アレックスは顎の下で両手を組んでいる。

グレーがかったビジネスマンにしては、やや長めの髪型だ。

まるで、フランス人作家のポートレートといった風情である。

ご丁寧に、クリックで写真の拡大まで出来る！

妻とは違い、一瞥して人間であると認識可能なばかりか、それなりのご面相だった。

もちろん、写真自体が、アドビ社の高額ソフトウェアを駆使した「お直し」の可能性もあるわけだが。

つまり、アレックスはスーパーリッチには、程遠いがそこそこ成功した部類という男だった。

例えば選挙

前に市議会議員のパーティーには必ず「お呼び」が掛かる程度には……。
そうは言っただって、自動車一台の買い替えに困る俺とは、比べ物にもならないことだけは確かだ。

ふと、アリツサ「デブばばあ・ゴールドウインの高価そうなハンドバッグが、目に浮かぶ。

怪獣との情事がお好みでないならば、小金のある夫としては、いくらでも性的欲求のはけ口を家庭外に容易に見出せるだろう。

コンピュータの接続を切ると、俺はデスクの固定電話の受話器を取り、短縮ダイヤルに入れてあるアンリの番号にかけた。

呼出音の代わりに、電話番号が現在使われていないというアナウンスが流れる。

このアナウンスを聞いたたび、俺はアンリのオフィスが、かれこれ、八か月ほど前に移転したことを思い出す。

モヴァを取り出し、本人の携帯に掛け直してみた。

六コール目に、のんびり、というよりは、間延びしたという方が適切な調子で、アンリが出た。

「アンリか？ 俺だ」

「ああ、スケアクロウ、久しぶりだねえ……どうしてた？」

のんびりに加えて、どのタイミングで返事を返したらいいのか？ 相変わらず会話の途切れ目が判らない。

「俺が部屋で凍死したら、血液鑑定は、お前の所に発注するよう遺言を書いていたところだ」

「ああ……暖房が壊れているのかい？ そりゃあ、大変だね」
ゆっくりなだけに、やけに同情に満ふれて聞こえる返事だった。

「でも、そんな仕事はまわってこないねえ、だって、市警にはちゃんとラボがあるからねえ……」

喋り方はとろくさいが、アンリは馬鹿ではない。それどころか、非常に優秀だ。

ヤツは、ドクターをニタイトル取得後、幾つかの公的研究機関を渡り歩いてきた。

最後の職場を辞める時には、まずほとんど起こりえないことだと思うが、奴の上司が上に掛け合い、公的機関としては考えられないレベルの報酬と待遇を申し出て慰留したと聞いている。

さらに噂によると、その上司は、アンリが研究所を去る日に追いつがって泣いたとも言われているが、まあ、それはおそらくただの噂であろう。

で、現在、独立してラボを構えているのアンリの稼ぎが如何ほどのものか、俺は関知していない。

「……どうしたんだい？ きょうは、なにか、僕に用事かい？」
まるきりバクダツトとの国際通話だ。三秒遅れのエコーバック。

俺が口を挟むタイミングを計りかねていると、アンリがだらだらと続けた。

「……あ、向こうで電話、ちょっと、待ってくれるかなあ」

モヴァを硬い物に置く音が響いた後、微かに電話のベルが聞こえた。アグネスが不在なのか、少なくとも四コールは鳴った後、アンリが、アロー？ とやらかしているのが聞こえてきた。あいつは、動作もゆっくりだ。

はつきりとは聞こえないが、フランス語で話しているようだった。俺も含めてカナダでは、実は大抵の人間が二つの公用語のうち、英語の方しか解さない。

だからと言ってバイリンガルが少ないわけではない。自分や家族の出身の言葉が出来る者は大勢いる。中国語とか、韓国語とか、その他聞いたことも無いようなナントカカントカ語……。

何の相性が悪いのか、ともかく俺のフランス語は、なかなか上達しなかった。

しかし……。あの速度で喋るのでもかまわないのなら、俺にもなんとかなりそうだ。フランス語を利用して、アンリの喋りは、まったくスピードアップしない。

三億光年くらい経った気がした。

一旦、切って掛け直そうかと思った瞬間、アンリが俺の電話に戻ってきた。

「……わかるかったね、スケアクロウ。待たせて……」

すかさず俺は、その三億光年の間に考えておいた手順で、一気に話を切り出した。

アレックス・ゴールドウィンのアタッシュケースの中に入っていた

という変態ヴァイブのこと。
念の為、「所有していた」と断定はしないでおいた……。

それに関して、本人や関係者の標本とヴァイブの付着物とのDNA照合鑑定を行ってもらうかもしれないこと。

依頼料金は、手元の三年前のカタログで計算してもかまわないかということ。

アンリからは、ケネディー宇宙センターからの問いかけに答えるアポロのアームストロングのようなタイミングで、返事がきた。

「うーん、そうだねえ……標本の方は、スケアクロウが調達するから……まあ……大丈夫だろう……と、思っただけどねえ。ヴァイブレーター本体から鑑定に足りるものが、採れるか……は約束が来ないよねえ……今は」

先を促す気持ちをこめて、俺はモヴァを耳に押し当てる手に思わず力を込めた。

「あ……あとねえ、料金は、半年前に改定したんだよ……データベースの利用料金が上がったんだ。そうだねえ、アグネスに、新しい料金を、メールで送ってもらおうように、言った方がいいかなあ……どうかなあ……スケアクロウ？」

「FAXにしてくれ。」

俺は即答した。

「馬鹿でかいファイルをメールで送られると困る」

アグネスは、アンリのところの「セクレタリー」という肩書きの何でも係だ。

そして、事務所の財布も握っている。

知り合いのADSL業者を紹介しようか？ というアンリの申出を、また今度と断って、俺は電話を切った。

ウェブサイトから得た情報によると、デブはあのヴァイブ旦那、アレックス・ゴールドウインのオフィスは、ちょうどセント・クレアとエグリントンの間くらいだった。

どのみち、五時にはノースウエストのオフィスに顔を出す必要があった。

大した時間は取れないが、行きがけの駄賃で、俺はアレックスのオフィスの周辺を覗いてみることにした。

橋を渡って、ベイヴュー・アベニューに入った辺りで、車の流れが完全に止まってしまった。

引き返して迂回しようとする車も列から出られない。

見通しは悪くなかったので、窓を開けて顔を出してみた。風はやんでいた。

百五十メートル位先の方で、大型の作業車が止まっている。前に停まっている濃紺のインテグラに、スーツ姿の韓国系か中国系の男が戻ってきた。

降りて渋滞の先を見てきたらしい。

俺が窓から頭を突き出して前方を見てみると、インテグラの男は「水道管が破裂したようだ」と、見事なまでのカナディアン・イングリッシュで話しかけてきた。

俺より若く見えるが、東洋人の年齢は分かり難い。ともかく筋金入のカナダ育ちに間違いはなさそうだった。

それに、男は随分仕立ての良いシャツを着ていた。ブルック・アンド・ブラザーズ辺りのイニシャル入りオーダーメイドといったところだ。

「まいったな」と、俺は思わず独りごちた。

もう四時前だ。このままじゃ、ゴールドウインの事務所に寄ってる暇はなくなりそうだ。

「とにかく、どうにかしてここから迂回した方がいい。この先、通りは大洪水さ」

ブルック・アンド・ブラザーズは誠実そうな口調で助言してくれたが、なんとなく余計なお世話といった気分にもさせられる。

「市庁舎だけじゃ、スケートリンクが足りないってことかね？」

と返答した俺には答えず、男は、俺に自分の言いたい事だけ言ってインテグラに乗り込み、ドアを勢いよく閉めた。

軽やかに、インテグラのエンジンがかかる。

ブルック・アンド・ブラザーズは、隣の車線のピックアップバンの前にあっただわずかミニカー1台分程の隙間に、強引に鼻面を入り込ませると、あっという間にUターンを決め込んだ。

インテグラに割り込まれたピックアップバンの方は、急ブレーキを踏んだ。

そして、その弾みでピックアップが、俺の車のミラーを十五センチ程擦った。

見事な音を立てて。

ピックアップの中から、南米系の男が遠ざかって行くインテグラに向かって、俺には全く再現不能な罵詈雑言を浴びせさせていた。そして、バンから降りてくると、こうなったのはインテグラのせいだと、しきりに俺に捲し立てくる。

それを宥めながら、俺はとにかく奴の保険会社の電話番号を聞こうと努力した。

……あんな隙間に割り込みをしたインテグラが悪い、それは判った。それはいいから。で？

お前の保険会社はどこだ？

こうやって不毛なやり取り繰り返した結果、俺にもやっと飲み込めてきた。

おそらく奴はマトモに保険に入っていないということが……。

というか、もしかしてこいつは、免許すらも持っていないのではないのだろうか？

溜息をつく、俺はピックアップバンの男に「行け」と手を振った。

この車はどうせ買い替えるんだ……。

俺は自分に言い聞かせた。

ピックアップバンのドライバーは、俺の手ぶりを見ると、してやったりとばかりに、そそくさとバンに戻り、すぐさまその場を走り去った。

俺も半ばヤケクソで、逆車線に無理無理、車を割り込ませてUターンした。

十二月三日（火） （1）

5

めずらしいことに、今朝は『フィッシャー・マンズ・ワーフ』のパークキングで、ポーと行き会わなかった。

今日二本目のタバコを火を点けず銜えたまま、俺は階段を上がる。オフィス宛ての郵便物を両手で仕分けながら、三階のエレベータホールを左に曲がろうとしたところで、アジア系の若い女性とぶつかった。

「失礼」と俺が声をかけると、彼女はオリエンタル特有の曖昧な微笑みを返して、急ぎ足でエレベータに乗り込んでいった。

これまた滅多に無いことだが、三階の廊下は人であふれており、様々な大きさのプラスチックケースや厚紙の箱が、ごたごたと運び込まれていた。

俺のオフィスの向かいのドアがふた部屋分、開け放たれている。賑やかに指示を出す快活な男の音が、フロア中に響き渡っていた。

銜えていた今日の二本目に火をつけ、荷物や台車をよけつつ、三〇八号室の前までたどり着く。

「やあ！ リードさんですか？ 騒々しくて申し訳ない」
俺がポケットからキーを取り出したところで、背後から元気いっぱいの声がボールのように弾んできた。

背中から、思いっきりバスケットボールを当てられたような気分
で振り返ると、向かいのドアから、これまた満面に笑みをたたえた白
人の男が、俺に近づいてきた。

薄い茶色の瞳を、朝っぱらから異様に輝かせたその男は、小さな楕
円形のフレームの眼鏡をかけていた。

「マーカム・スタンレーです」

こういって、男は俺の右手を取り、しっかりと握りしめ、力強く上
下に振った。

なぜだか判らないが、左手で俺の右肘を叩きながら……。

「このあたりの数ブロックを利用して、これから一ヶ月の予定で撮
影させてもらう事になっているんですよ。私はマネージメントを担
当してまして、ここがその臨時オフィスってわけです」

男は俺が尋ねてもいないのに、早口で説明を始めた。

このハイ・テンション……。プロザック、一日五錠ってクチだろう。

「こんなロケーションで探偵事務所なんて、いやはや、渋いじゃな
いですか？ リードさん、くわえ煙草もキマってますね。しかし、
背が高いな。そうかどうかです、ちょっとカメラにも映ってみませ
んか、リードさん？」

俺の名前は「リード」ではないのだが、とは思ったが、訂正するの
も面倒なので放っておくことにした。

「いやいや、冗談抜きで。ホントに、シナリオチームに役をつくら
せませすよ」

放って置いたら、いつまででも続きそうな勢いだった。

俺は、曖昧に頷きながら会話を切り上げて、事務所に入った。吸い終わった二本目を灰皿に入れ、窓を開ける。

三本目のタバコに火を付け、ゆっくりと吸いこむ。

窓からは、河と線路と『フィッシャーマンズ・ワーフ』とそのパークキングが見える。

『フィッシャーマンズ・ワーフ』の厨房からは白い湯気が上がっていた。

これから当分は、あの店も少しは入りが良くなるかもしれない。この辺りの人の出入りも増えるだろうから。

俺はコンピュータの電源を入れた。

OSの作動メロディを聞きながら、棚からフィルターとマンデリンを取り出す。

首筋を冷風が吹き抜けるが、窓は開けておいた。昨日の「デブはあ」の猛烈な香水の臭気が、まだ残っていそうな気がするからだ。

コンピュータのデスクトップ画面に、やっとアイコンが表示されてくる。

取ってきた郵便物の殆どをごみ箱に投げ入れ、『トロント・スター』をぎっつと捲る。

わざわざ鳴らないよう設定するのが面倒で、ここ数年来、うっとうしいと思いつつも一日一回は聞いているOSの起動音について、今日の『ナショナル・ポスト』興味深い記事があった。

こいつは、随分有名な人間に大枚を叩いて作曲させているものだそ

うだ。

俺には、どう聞いても間の抜けた玄関チャイムのようにしか聞こえないのだが？

メーラーを立ち上げ、出来上がったばかりのマンデリンをマグカップにたっぷりと注いだ。

ふと思い出して、携帯電話モウァを取り出し、フェデックスに連絡する。例の「人造ペニス」をアンリに送りつけるためだ。

ダイアルアップ接続中なので、固定電話は使えない。

ということは、もちろん、オフィスに外から掛ってくる電話も受けられないということなのだが、いいかげんにこの通信環境も、なんとかしなければならぬだろうか。

俺はマンデリンをひとくち含む。

本来なら、鑑定内容を確定し、各種書類を添付して比較サンプルを揃えた上で依頼すべきところである。

だが、アンリとは短い付き合いじゃない。

細かいことをつべこべ言わず、出来るところから手をつけてくれるだろう。

どのみち、サンプル提供者の承諾なしのDNA鑑定なんて、違法スレスレなのだから。

とにかく、このエグイ物体が、これ以上手元にあるのはうんざりだった。

口に含んだコーヒーを飲み下す前に、フェデックスに電話が繋がった。きつかりワンコールだ。

丁度タイミングが良かったらしく、後十分程でピックアップに行けると、オペレータは俺に告げた。

優秀なフェデックスが十分後と言ったならば、十分後に来るに決まっている。

カナダ・ポストとは、訳が違うのだ。

俺は慌てて、ストックしてあるフェデックスの封筒をデスクの奥から探し出した。

ジップロックのチャックが閉まっているかを確認する。

この事務所では、フェデックスなんて滅多に使わない。

報告書は直に渡すのが基本。相手の希望によって送付もするが、それはごく稀だ。

当然、その際のフェデックス代金は……もちろん、DHLだってかまわないが……しつかり別料金だ。

アンリのラボも基本的にはサンプルと依頼書は手渡しが原則だが、フェデックスに限っては利用可能だ。受渡時の責任の所在を、はっきり契約処理してあるのだろう。

そういうことで、このフェデックス送料はアンリのラボ持ちという事になっている。俺も心置きなく利用できると言っわけだ。

ドアがノックされた。

先ほどの電話から、まだ五分と経ってはいない。

フェデックスだとしたら驚いたものだ。さすが馬鹿高い料金を取るだけのことはある。

俺がドアを開けると、そこに立っていたのは、胸に社名を縫取つてあるグレーのつなぎを着た配達員でなどではなく、マーカム・スタンレーだった。

「突然申し訳ありません……」

マーカムは面食らったように声を詰まらせながら、俺に挨拶した。

「何か御用で？」

努めて丁寧に應對したつもりだったが、マーカムの顔から狼狽の表情が消えない。

「こ、今後の撮影スケジュール表をお持ちしたんですよ。あの、近隣の方々には、その、いろいろご迷惑をおかけすると思えますのでね……」

マーカムはタブロイド紙位の大きさの紙を差し出した。それを受け取るうとして俺はやっと気が付いた。

マーカムの視線は俺が左手に持っていたジップロックに釘づけになっていたのだった。

いや、正確にはジップロックの中の、黒の極太蛍光イボ付き人造ペニスに……。

俺はジップロックを持った方の手でドアを抑えながら、マーカムから予定表を受け取り、短く礼を言った。

マーカムは、予定は必ず変更がありうるので、その都度お知らせしますとか、来週にはハリウッドの超大物がロケにやってくるからお

楽しみにだのと慌ててまくし立てながら、向かいの部屋へと去っていった。

……別に。

マーカム・スタンレーに、何をどう思われても一向にかまわないのではあるが……。

やはり、俺はなんとなく不本意だった。

俺は溜息をつきながら、ヴァイヴ入りのジップロックを封筒に突っ込み、急いで封をした。

程なくフェデックスが集荷にやって来た。

忌々しいジップロックを手放して、俺は清々した気分でマンデリンを口に含んだ。

そして、マウスをつついて、デスクトップを生き返らせる。

信じられないことだが、メーラーは、いまだメールの受信を続行中だった。

俺はふたたび溜息をついた。

……やはり、本当にもろもろ、何とかしなければならぬ時なのだろうか？

十二月三日（火） （2）

6

メールチェックを終え、ノースウエストの件と、アリッサ・デブはばあ・ゴールドウインの書類のファイリングを済ませると、もう、昼になっていた。

きりも良いので、俺はランチがてら出掛けることにした。

昨日のザリガニの一件もあり、さすがに今日は「フィッシャーマンズ・ワーフ」に顔を出しづらい。それに、オフィスのコーヒード豆とフィルターも買い足して置きたかった。

階段を降り、ホールでもう一度郵便受けを確認すると、俺は表へ出た。

昨日よりは幾分風が少ないようだ。

俺はストリートカーの停留所^{ストップ}まで早足で歩いた。通りに行き当たったところで、ちょうど一台、交差点を通り過ぎていくのが見えた。

路面に撒かれた除雪剤の粒がきらきらと光るのを見ながら、仕方なく次を待つ。

吹きさらしの中、風が身体に染みてくる。

立てた襟の中に首を縮めていると、次の車両が来た。

ウィークデイの昼前にしては乗客が多く、車の中は人いきれで暖か

かった。

こんな路線には珍しく、観光客らしい東洋人が一人乗っている。ビデオカメラで車窓の風景を撮っているようだ。こんな場所の景色を撮ってどうするのだろうか？

目的地よりは若干、手前だったが、奥の客が降りだしたので、俺もそこでストリートカーを降りた。

車両の後ろで一旦停止している自動車の前を急ぎ足で横切り、俺は目当てのグローサリ雑貨店へと向かった。

店に入ると、グライNDERの音がして、挽きたてのコーヒーの香りが漂っていた。

窓が小さな古い建物で、いつも薄暗い。

グローサリとは名ばかりで、コーヒーの他は、ほんの付け足しのように雑貨が置いてあるだけだ。いつ仕入れたのか判らない台所洗剤とか、埃を被ったタンパックスの箱とか。

グライNDERの音が止んだ。

カウンターの奥で挽き終わった豆の袋を、危なっかしい手つきで封をする店主に、客が何か話しかけている。

手間取りながらも、店主が一粒こぼすことも無く袋の口を密封すると、先客は会計を済ませて出て行った。

俺はカウンターへ近づいた。

店主は、随分な年寄りの爺さんだ。

俺が初めてこの店にきた時も、今と同じくらい年寄りだったから、店主はかなりの間、年寄りでいることになる。

恐ろしく度の強い鼈甲ぶちの眼鏡をかけているせいで、鼻が低い訳でもないのに、あまりのレンズの重みのために、眼鏡がいつも傾い

でいる。

俺は店主に挨拶をして、いつもの豆を二百グラムずつ3パック、中挽きにしてくれるよう頼んだ。

そして、手を伸ばして棚から徳用コーヒーフィルター二パックを掴み取り、カウンターに載せた。

「カペ・アラミドが入っているが、飲むか？」

傾いだ眼鏡を押し上げながら、店主は俺に聞いてきた。

「それは珍しい」と俺が答えると、店主は黙って頷いた。

続いて、プラスチックの袋を三つ用意し、ゆっくりと、だが几帳面に一つをグラインダーにセットし、残り二つをその横に並べた。

店主は六百グラムの豆を量って準備すると、グラインダーのスイッチを入れた。

そのまま、無言で店の奥へと入っていくと、店主はトレイを持って戻ってきた。

手が小刻みに震えて、トレイの上の物が小さな音を立てている。

豆が入っているらしい缶と手廻のグラインダー、デミダスカップとソーサーが二客、サーバーとネルドリップが載っていた。

カップとサーバーは既に暖められているようだ。

店主は震える手で缶とグラインダーをトレイから下ろし、俺の方へと押しやった。

そして、最初の二百グラムを挽き終わった機械式のグラインダーの方に新しい袋をセットすると、またスイッチを押し、再び奥へと消えていった。

俺に、この豆を挽けということらしい。

缶を開けると、浅めに煎った豆が半分くらい入っていた。俺は少し試挽きして、グラインダーを調節し、大体三十グラムほど挽いた。店主がヤカンを持って現われた。そして、その場でドリップを始めた。

元々コーヒーの香りが充満している店の中にいてさえ、独特の香りが立つてくるのがはつきりと判る。

アラミドは、この強い香りせいで、好き嫌いがかなり分かれるのではないかと思われる。

店主の几帳面なドリップを見ながら、最近、最後にネルで淹れたコーヒーを飲んだのはいつだったかなどと、俺は思い返していた。

カップにコーヒーを注ぎ淹れ、店主は俺の方へと薦めた。礼を言い、俺はカップを持ち上げて口元へ運んだ。

俺が一口飲むのを見届けて、店主も自分のカップを取り上げた。

「どうだ？」店主が尋ねる。

「美味しいね」

これ以上は答えようがなかった。

「ガツファアおやしさんが淹れれば、大抵どんな豆も美味しいけどね」

店主はそれには答えなかった。それから、俺達は黙ってコーヒーを飲んだ。

先に飲み終わった店主は、最後の二百グラムをグラインダーにかけ、出来上がった二パックの密閉にとりかっていた。

挽き終わった三パックとコーヒーフィルターを紙袋に詰めている店

主に、俺はつい、

「アラミドも貰おうか」と声をかけてしまった。
さすがに、飲み逃げは気が引けた。

「何グラム？」

店主はレシートを書きながら、俺をちらりと見上げ、手にした鉛筆でアルバート・アインシュタインそっくりの頭髪を掻いた。

「百……いや、五十でいい」

俺が答えると、レシートに一筆書き加え、アインシュタインから空気を抜いて小さく縮めたような店主は、再度奥へと入った。

俺はレシートが一番下の部分に目をやった。アラミドはいくらだろう。

しかし、いつもの事ながら悪筆過ぎて値段どころか、何が書いてあるのかも判読できなかった。

「自分で挽くだろう？」と言いながら親父が缶を片手に、奥から出てくる。

五十グラム分を小さなプラスティックバックに移し、紙袋の一番上へと入れ込んだ。

いつものことだが、店主は打ち間違えて、電卓での足し算を三回ほどやり直した。

勘定を終え、俺は店を出た。

予定外の出費になってしまった……。

あの手の豆は嫌いではないのだが、これほどの法外な金額を出してまで飲むとは、正直そうそう思えないのだ。

数軒先の東欧系の店でソーセージを挟んだパンを買い、その場で食べて昼飯にした。

俺は再びストリートカーに乗り、オフィスへと向かった。

オフィスに戻ると、俺はコーヒーフィルターを棚に仕舞い、冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出して飲んだ。

さっきのアラミドの香りが、まだ喉から鼻にかけて残っている。

留守番電話のメッセージランプが点滅しているのに気が付き、何気なく再生ボタンを押す。

いきなり、アリッサ「デブばあ・ゴールドウィンの金切り声が再生された。

俺はさっき食ったソーセージが口から飛び出すかと思うほど、面食らった。

「デブばあ」は、電話口でしばらく何だかんだとわめいていたが、結局、内容は調査着手金を指定どおり振り込んだということのようだった。

だから、きちんと調査しろと。

銀行に寄ってきたので、実は、俺は既にデブばあからの入金を確認済みだった。

もらったものを貰ってしまったことだし、今日は、さすがに、昨日覗きぞびれたゴールドウィンの「文房具屋」に行かねばならないだろう。

「過ぎたことを後悔するのは、人生の無駄遣い。バカのこと」というのは、俺自身の母親と俺の意見が一致する数少ない点である。

確かに、俺の母親は過ぎたことを全く後悔しない。

一方、俺はというと、必ずしもそういって訳でもないのです、この点に

については、互いに決定的に異なっているわけなのだが……。つまり、俺はアリッサの依頼を引き受けてしまったことを、今現在少々、後悔しつつあったのだ。

特に、今見る必要もないようなウェブサイトのニュースコラムを、何となしに見たりして、PCのを落として、明かりを消し、留守番電話のスイッチを入れ、戸締りをして、アリッサの依頼を調査するためにオフィスを出なければならぬのを、引き伸ばし続けていた。

……「法外」という言葉でも表現しきれないほどの、ステイツの処方薬の価格高騰から逃れるため、カナダ人との偽造結婚を勧める団体についてレポートした画面で、ブラウザがハングした。

それを潮に、俺はアリッサから依頼された調査に着手する事にした。PCの電源ボタンを長押しして、シャットダウンし、俺はついにオフイスを出た。

何はともあれ、両親が移民したのがカナダでよかった。

俺は、今日6本目のタバコに火をつけ、階段を降りながら、こう考えた。

咳止め用の吸引薬が、1本四百USDドルとは！

こつちじや^{カナダ}病院にかかればタダでもらえるのに?! まったく、ステイツじゃ、安心してタバコも吸えやしないな。

十二月三日（火） （3）

7

俺がノース・ヨーク・センター駅近くのゴールドウインのオフィス前にたどりついた時には、すでに四時二十分を回っていた。車の中から、しばらくオフィスの建物を眺めることにした。

アレックスの一日のタイムスケジュールについて、アリッサに電話で尋ねてみたのだが、「一定したものは無い、仕事次第で、帰宅時間も退社時間もまちまちだ」の一点ばりだった。

俺の質問をうるさそうに切り捨て、デブばあは電話を切りやがった。

夫のバッグを盗み見たりするわりに、実は夫自身に対して、本当はさして興味などないのではないかという気もしてこないではない。

ジャケットのポケットから、タバコのパックをとりだす。残り二本しかなくなった。まだ、今日の七本目だというのに。

火をつけて、最初の一息を吐き出す。

通りのざわめきに交じって、巻紙の燃える音が微かに聞こえる。

なるべく視野の端のほうでゴールドウインのオフィスが入っているビルディングの出入口を眺める。

警備会社の制服を着た警備員ガイディアンが二名、張り付いている。

出て行く人間のチェックに一名、入ってくる人間に一名。

警備に「金は」かけていますといった力強いアピールを感じはするが、ただそれだけのことだ。

律儀にも、そこを通行する者は皆、首からボールチェーンで吊るしている顔写真付きの身分証明を警備員に見せていた。

あれは、まるつきり犬の首輪だ。

ああいう物は、一体いつ頃から当たり前に身に付けられるようになったんだろうか……。

アリッサの旦那があちこち飛び回って仕事をするタイプで、出先から直接帰宅したりするようであれば、こんなところに、俺がぼろ車を止めて待っていたって、何の役にも立たない。

ただ、デブばばあの要領を得ない話しぶりを総合すると、毎日遅くとも十二時頃までには、家に帰ってきているようだった。

あんなオットセイの住む家にきちんと毎日帰るなんて、それだけでもアレックスという人間は、称賛に値するではないか？

とはいえ、こんなところにそう長時間、車を止め続けることも出来ない。

正直、俺は今後の調査について、なんら具体的展望を持っていないかった。

重ねて正直に言うと、俺には、全くやる気が起きていないということだ。

仏頂面のガーディアンが、突然、表情を変えた。

俺は再び、建物の玄関に視線を戻す。

その場に並んだガーディアンの体格が良すぎることを差し引いたとしても、まあ、小柄と表現するのが妥当な体格の男性が、表に出ようとしていた。

ガーディアンの一人は、制帽に軽く手まで添えて、その小柄な男に挨拶している。

その男は、高級そうではあるが、臙脂色の配色がいささか悪趣味なチエックのマフラーの中に亀のように首をすぼめていた。さらに、マキシ丈のアクアスキュータムとおぼしきトレンチコートを着込んでいる。

コートのサイズこそは合っているものの、ロング・トレンチは、小柄な男の見た目を良くするのにつけて、とは言いがたい。おそらく親切な店員が不在だったのであろう。

金だけはかかっているが、いまひとつセンスのないその服装に気をとられながらも、俺は男の顔にどことなく見覚えがある気がしていた。

その人物が誰であるか気がつくまでに、俺は数秒を要した。

「……アレックス・ゴールドウィン?!」
俺は思わず声を上げた。

直ぐに気がつかなかったことについては、致し方なかるう。俺は自分を慰めざるをえなかった。

俺の目の前にいるアレックスは、ウェブサイト掲載の「斜め四十五度写真」よりも、ごく控えめに言っても十キロはウエイトが増加していたし、頭髪の方はといえば、四割ほど減少している。

アレックスは、駐停車禁止ラインの途切れ目まで歩くと手を上げ、タクシーを止めて乗り込んだ。

俺はそのタクシーのナンバーを瞬間的に憶えた。

尾行する車のナンバーを覚えるのは、前職からの俺の癖だ。

コツは「数字」を覚えないことだ。車のバンパーやナンバープレートの状態、その周りの町並みと一緒に、頭の中で写真に撮るように

覚える。

その画像を思い出せば、ナンバーも自然とその「絵」の中に書いてあるというわけだ。

まだ、夕方のラッシュも始まっていなかった。

アレックスの乗ったタクシーは、ヤングストリートをまっすぐに南へと走っていく。

アレックスの乗ったタクシーは、ウェルズリー駅の前で止まった。

このままサブウェイの構内にも入られたら見失ってしまう可能性があるがある。

俺は、慌ててパーキングメータを探して視線をさまよわせた。

運良く、今まさに枠から出ようとしているトヨタを見つけると、俺はその尻に張り付いて、まるでレストランの席取りをする広東人並みの強引さで、その枠の中に自分のおんぼろフォードをねじ込む。

パーキングメータは、こここのところめつきり数が減ってきたコイン式だった。

しばらく前から、俺はもう以前のように1ドル^{ルーター}硬貨をポケットにジヤラつかせておく必要を感じていなかった。この展開には少々戸惑った。

昼のソーセージのつり銭を入れておいたはずの、ポケットをまさぐってみたが、最低額面には1ドルばかり足りなかった。

思わず罵り言葉をつぶやきながら、アレックスを横目で追い続ける。サブウェイに下りて行く気配は見えない。それは不幸中の幸いであった。

さらにポリアンナの付け加えるならば、前のトヨタが入れていたメータがまだ三十分以上残っていた。

アレックスの尾行が三十分で終了して、ここに戻れる保障は、もちろんない。

もし、違反切符でも切られたら、すぐさま経費に上乘せしてやるが、レッカー異動 トーイングでもされた日には、代わりの車を持たない俺の商売は、上がったるである。

叩くと「ビスキューイ」が増えるポケットならぬ、ルーニーの増えるポケットがあれば、万事解決なのだが……。

ともかくどこかに1ドルくらい紛れ込んでいないかと、俺がポケットというポケットに手をつっこんでみると、背後から声がした。

アレックスは、広がって道をふさいでいる観光客のグループを押し
のけつつ、チャーチストリートの方角へと進んでいく。

最初は、定まった行き先に向けて真直ぐに歩いているといった印象
であったが、アレックスは、次第に右に左にと視線を泳がせ、何か
に気をとられたりするようになってきた。

とはいっても、俺の尾行に気が付いている、というわけでもないよ
うだった。

ミシユラン・タイヤのマスコットのようなコートを着込んだ黄土色
の巻毛の中年女性にぶつかりそうになり、胃液まで凍りつきそうな
颯颯の眼差しを向けられたのにも、アレックスは気が付いていない
くらいだった。

さつきパーキングメータのところ、俺に声をかけてきたのは黒い
ハンカチを頭に被った背の低い老婆だった。

頭巾と額の境目から銀色の髪の毛が光っていた。

老婆は、笑顔で俺を見つめると、かなり怪しい英語で、「男の子の部屋に急ぎの用かい？」といい、しきりと頷きながら俺に1ドルを握らせた。

「エフハリスト、マダム」

彼女はギリシャ系ではないかと踏んで、俺はかろうじて知っていたギリシャ語で何遍も礼を言い、1ドルをありがたく頂戴した。もちろんトイレに行きたかったわけじゃないことは、説明しなかった。

それにしても……見ず知らずの他人に1ドル、恵んでもらうとは。

いや。そもそも、尾行は一人でやるような仕事ではないのだ、本来ならば。

尾行の途中で撒かれるのなら、まだいい。

最悪なのは、顔が割れることだ。そうなたって、俺には代替車両もなければ、尾行の代替要員もないのだ。

調査は、そこですべてオシマイってことになる。

どんどん歩く速度が遅くなるアレックスに追いついてしまわないように、俺は細心の注意を払いながら、距離を開けて歩く。

チャーチストリートに行き当たると、アレックスは右に折れ、南の方へと下っていく。

まだ少々日が高いが、そろそろ一杯飲んでもまずくはない時間といえなくもなかった。

気の早い観光客は、ドラッグクイーンが愛想振りまくバーの入口で首を伸ばし、その中をうかがっている。

アレックスは、相変わらずよそ見ばかりしながら歩いていたが、ふと東の方へ曲がり、わき道に入ってしまった。

そこは裏通りで、くすんだ黄色の日除けが、ポツリとひとつ目立っているだけだった。

通りのつきあたりは行き止まりになっている。

アレックスは、その黄色の日除けの下で止まった。

そして、木製の古い扉の中へと吸い込まれるように消えた。

見るからに小さそうな店だ。中に入ってしまったら、アレックスと顔を突き合わせることになる危険性は高そうだった。加えて、どんな氏素性の何の店かも分からない。

かといって、人通りのない裏通りだとはいえ、身長百九十センチの大男が、このままぼんやり立っているというわけにもいくまい。

俺は、黄色の日除けの前を通り過ぎ、扉の横に出してある小さなプレートに書いてある名前を目に焼き付けた。

袋小路まで行き当たると、その隅にミディアムサイズのピザくらいの隙間を見つけた。ざっと見渡すが、周囲に窓やドアも見当たらない。

ちょうど死角になっているといえそうだった。

アレックスがその黄色い日除けの店で、どんなことを、どれくらいの時間やるつもりなのか、俺には、皆目見当もつかない。

だが、ヤツが出てくるまで、待てるだけ待ってみようと腹を決めた。袋小路のビルのを越えて、もう一本東へ行けばもう、ジャービスストリートだ。

表向きにバーだとか、リストランテだとかの看板を掲げていたとしても、この辺りの店が本当は何をやっているかなんて、俺にもいち

ち判らない。この辺りはそういうところだ。

壁に寄りかかり、とりあえず俺は今日8本目のタバコを取り出した。手持ちのタバコも残りあと1本とは……。つくづく段取りの悪い午後だ。

表通りからほんの10メートルも入っていないのに、車や人の通りが途絶えると、途端にあたりは静まり返る。

突然、砂袋を放り投げるような音がした。

朽ちて踏板が歯抜けのようになった非常階段の踊り場から、一匹の猫が目の前の塀に落ちてきた。

車道の雪みだいに薄汚いグレーの長い毛皮には、ゴミくずがいつぱい絡まっていたが、その猫が餌には事欠かない暮らしぶりであることは、十分に見て取れた。

辺りには、ふたたび静寂が広がる。猫の呼吸音が聞こえそうなくらいだ。

ふと気がつくと、ゴミだらけの灰色猫が、俺の足元に寄り付いていた。た。

タバコの煙が気にならないのだろうか？

足を左右に動かして追い払おうとしたが、猫は全く動じることなく俺の両足の間に入り込んできた。

俺のズボンの裾には、ごっそりと猫の毛がついていた。

アレックスが、黄色の日除けのドアの中に吸い込まれてから、三十分以上が過ぎていた。

俺が9本目のタバコに火をつけようかどうか逡巡していると、突然、ドアの開く音がした。と同時に、俺の足元にいた猫が通りへと飛び出す。

足音の感じから、店から出た人物は一人のようだった。

表通りの方に遠ざかっていくのを見計らう。

俺は壁の隙間から様子を覗い、道にひと気が無いのを確認すると、素早く表通りの方へと移動した。

かなり運良く、俺は通りの人波の中にウェルズリーの方向に歩いていくアレックス・ゴールドウィンの薄くなった頭頂部を発見することができた。

少なめの頭髪というものは、スイートコーンの天辺についている毛を思いおこさせる。

あの位、頭髪に覇気が無くなったならば、俺は潔くスキンヘッドにしよう……と言つような益体もないことを考えつつ、視野の端の方にアレックスの頭を置きながら歩いた。

周囲のバーに視線を泳がせながら、漂うように歩いていたアレックスは、ドアが開け放たれているバーの前で立ち止まると、その中に吸い込まれていった。

俺も、他の客にまぎれて店に入ってみた。

ハッピーアワー目当ての客で、バーはまあまあ入りだった。

俺はざっと店内に視線を走らせる。

スタイリッシュなサングラスに、腰周りにぴったりと張り付いたパンツ姿のゲイグループ、半額ドリンク目当ての仕事帰りのヘテロ・

カップル、シヨルダーバッグを抱えたツーリストなどが、今日の一杯目と思しき酒に口をつけている。

上着は着たままで、俺は奥へと入っていった。

カウンターには、長身のバーテンダーが立っていた。メタルバンドのギタリストのような出で立ちだった。

貯金をつぎ込み、タイあたり的高级リゾートで作りこんできたに違いないご自慢のバストを、乳首ぎりぎりまで晒している。

少々ダイエツトが過ぎたのか、喉仏のふくらみが目立つ。しかし、それを除けば、なかなかの「美女」ぶりだ。

「女性」というには大きすぎる手で、ブラックオリブを次々とピツクに刺しているさまは、妙に繊細で倒錯的なムードすら漂っていた。

アレックスは、バーテンダーに声をかけると、半パイントのビールを買った。

露骨にバーテンダーの胸の谷間に好色な視線を向けている。

しかし、それもつかの間、やがて、アレックスは、店の中をきよろきよろと見回しはじめた。

そして、店の左奥のテーブルに寄りかかってタンブラーをもてあそんでいる、全身をプラダ、またはそれと良く似たファスト・ファッションの洋服で身を固めている若い男のグループに目を留めた。

そして、ふらふらと引き寄せられるように、その近くへと寄っていく。

プラダ達は、アレックスの無遠慮な視線を完全に無視しし、連れの肩に顎を乗せて寄りかかったり、尻をわしづかみにし合ったりして

いる。

俺もカウンターへと歩み寄り、メタルなバーテンダーにスコッチを注文した。

そして、ついでにタバコを置いてあるか尋ねてみた。

バーテンダーは、黙って頷くと、カウンターに1シヨットのストリートとマルボロを滑らせた。

そして、スモーキーな声で値段を言うと、「あっちで吸って」と顎を横に振った。

残念ながら、タバコの方はハッピーアワー価格にはならなかったようだ。俺はチップも含めて、半額スコッチ三杯分にあたる金額を、バーテンダーに滑らせた。

アレックスの方に再び視線を投げたが、相変わらず、若いゲイ集団に目を釘付けにしていた。単なる好奇心というには、度が過ぎる感じだ。

……そっちの「ご趣味」もあるのか？ と俺が心の中でひとりごち、スコッチのグラスに口をつけた時、店の化粧室のドアが開いた。

出てきたのは、鱗のようにスパンコールがついたドレスと毛皮のジヤケットを身に纏い、きつく染めたブロンドをたてがみのように逆立てた、絵に書いたようなドラッグクイーンだった。

そのドラッグクイーンは、目ざとく俺に目を留めた。俺に身を隠すいとまも与えぬほどの素早さだった。そして、ヤツは店中に響き渡るような大声で叫んだ。

「いやだ！ めっずらしいわね？ スケアクロウ。こんなところゲイバーで

会うなんて。一体、どういふ風の吹き回し？」

……最悪だ。

ヤツは、ピンヒールの踵の音を派手に立てながら、カウンターにいる俺に大股で近づいてくると、また何か叫ぼうとして口を開けかけた。

俺は急いでヤツの肩に手を回し抱き寄せてから、その口に人差し指を当てた。

マックスは、身をくねらせて右手を口元へと寄せ、小声でわざとらしい嬌声をあげた。

そして、俺に身体を擦り付けながら、バーテンダーの方に自慢気な視線を投げる。

全く不本意ではあったが、俺はヤツの耳元に口を寄せた。小声で話さなければならぬからだ。

「わめきまわるのは勘弁してくれ、マックス。尾行中なんだ」

俺は掌に嫌な感じの汗がにじむのを感じながらも、更にマックスを抱き寄せた。

マックスを陰にして、出来るだけアレックスに顔を見られぬようにしようとする涙ぐましい努力だ。

とはいえ、アレックスはプラダ達に夢中で、俺やマックスに注意を向けた様子はなかったのだが。

背に腹かえられず、俺が嫌々抱き寄せていることなど、マックスは十分承知のはずだった。

だが、ヤツは、この際とばかりに俺に顔を近づけると、ねっとり囁き返した。

「で？ 誰。誰を追ってるわけ？」

「……斜め後、出腹の薄毛」俺は更に声を殺して言った。

露骨に振り返えろとするマックスを制し、俺はカウンターの後のガラスに映ったアレックスの後頭を指し示した。

「はん。さつきから、ジョシュ達を物欲しげに眺めまくってる、あのスケベね」

マックスは言い、バーテンダーにマティーニを注文する。

「あのプラダのマヌカンみたいな連中、知り合いなのか？ マックス」

マックスはそれを聞くと、一声、大きく笑ってみせ、俺の耳を食いちぎらんばかりの勢いで、顔を寄せて言った。

「ジョシュ達のこと？ まだ若い子達よ。プラダなんか買えないわ」

「ただのゲイか？ それとも……」俺は尋ねた。

マックスは、メタルのバーテンダーからドライ・マティーニを受け取りながら、バーテンダーのメロンのようなバストを指でつついてみせる。

そして、ピックを指で押さえながらマティーニをひと口飲み、俺の方に肩を寄せた。

「別に……普通の子達よ。まあ、たまにちょっと『やんちゃ』することもあるだろうけどね」

「どんな『やんちゃ』を？」

「まあ、「お付き合い」すると見せかけて、たんまりおごらせて、最後は相手置いて帰ってきちゃうとか……そんな程度よ、可愛いもんだわ」

「『商売』してるわけじゃなく？」

重ねて尋ねると、マックスは俺を見上げて、「ううん。プロ男娼じゃないわよ」と答え、ピツクのオリーブを齧った。

アレックスはビールを飲み干すと、空のジョッキを片手に、ぶらぶらとプラダ達の方へ近づいて行く。

「あらあら。それこそプラダでも買ってやらないと、ジョシュ達になんか、相手にされないわよ、あのおじさん」

マックスはバーテンダーの方を向いて、ほとんど声を出さず、口だけを動かして言った。

バーテンダーは、カクテルグラスを磨きながら「ジョシュは面食いだからね」とスモーキーヴォイスで返す。

マックスは黙って頷き、五十ドル札とピツクをコースターの横に並べて置くと、残りのマティーニを飲み干し、スツールから立ちあがった。

「後で、店The Barに寄りなさいよ、スケアクロウ。面白いこと教えてあげるわ」

マックスはそう言うと、俺の左頬にべったりとキスをして出ていった。

慌てて擦った俺の手の甲には、ヤツの口紅が血糊のように付いている

た。

それを見た途端、これまでの疲れがどつと噴き出した。と同時に、そろそろパーキングメータの残り時間が気になってくる。残り十分くらいだろうか。

意外なことに、メタルなバーテンダーが、湿らせたペーパーナプキンを俺に差し出してくれた。

このスモーキーヴォイスのドラッグクイーンに対する俺の好感度は、微妙に上昇した。

だが、いかにせん、俺は男と元男には興味が持てない。残念なことだが……。

飲み物の注文が混み合い出してきたようだ。

バーテンダーは複数のグラスを並べると、きびきびとシェーカーを手にした。

俺はもらったナプキンで頬をぬぐって礼を言い、ついでにバーテンダーに尋ねた。

「ウエルズリー駅前のパーキングメータ、この時間はどうか。違反チケットは」

「そうね……わりに遅くまで見回りにきてるわよ。大体、違反切られてるわね」

シェーカーに詰めたクラッシュドアイスの上に、カルーア・ミルクを1オンスばかり注ぎ入れながら、バーテンダーは答えた。かすれて、ほとんど聞き取れないくらいの声だった。

この時間からさすがに牽引車までは引つ張り出してくるまい。

俺はこのまま尾行を継続することに、心を決めた。

……違反切符代は、デブばあに経費で請求してやる。

スコッチの後は、ジンジャーエールを注文し、俺はアレックスの様子を見続けた。

だが、アレックスは、ジョシユ達をプラダのブティックに連れ出すどころか、とことん冷たくあしらわれ続けていた。

ビールを三杯、飲み終わった後で、アレックスは、やっとボーイハウンティングを諦めて、店を出た。

俺は9本目のタバコを取り出して銜えた。

空になったタバコの袋を炭酸の抜けたジンジャーエールの横に置き、アレックスに続いて店を出た。

それが八時前。それから出腹で薄毛のアレックスは、性懲りもなく数件のゲイバーをはしごし、グッチやヒューゴ・ボスの広告に出てくるような男たちに、次々と振られた。

そして、とうとう十二時前になって、通りがかったタクシーに乗り込んだ。

俺もタクシーを捕まえ、後を追う。

たどり着いたのはアレックスの自宅だった。

最終的にウエルズリーのパーキングメータに俺が戻ってきたのは、十二時半頃だった。

驚いたことに、かれこれ七、八時間もの間、俺のこげ茶のおんぼろフードは、切符を切られることもなく、トイニングされることもなく停まっていた。

フロントガラスの上に、ジュースの紙パックとホットドッグの包み紙が捨てられてはいたが……。

「『割れ窓理論』ってやつだな……」

俺は中身がまだ少し入ったままの紙パックを指でつまみ、三メートルほど先においてあるゴミ箱に投げ入れた。

割れた窓ガラスを放置したフラットのあるブロックには、犯罪が引き寄せられるそうだ。

ならば、廃車寸前のぼろ車は、ゴミを引き寄せるということになる。それを実証するかのように、俺の真後ろに停めてあるニューモデルのプジョーのボンネットには、埃一つ飛んできてはいなかった。

尾行初日から、俺は疲れて果ててしまっていた。

だが、何か少し腹にいれてから、The Barに立ちよってみることにした。

マックスの言う「面白いこと」とやらには、大して期待できないということとは予想できてはいる。

とはいえ、「蛇の道は蛇」というではないか？

マックスは「その筋」では、いわゆ顔だった。

……まあ、要は、年季の入ったオカマだっただけだが。

今日見たところでは、どうやら、アレックスは『その趣味』があるらしい。

だったら、マックスの話を聞いてみるのも、あながち悪くないだろう。

十二月三日（火） （4）

8

The Barの客は、俺一人だった。
ウィークデイの夜で、この時間、こんな場所にあることを考えれば、俺一人だって、入りが良いと言えるだろう。

俺はシャルドネと氷が入ったタンブラーに、ペリエを注ぎながら、バーテンダーの背後に並んだ酒瓶のラベルを、読むともなしに見ていた。

すると、背後のドアが派手に押し開けられた。
夜の外気とともにローズアブソリュウの香りが流れてくる。

消耗しきった俺の背中に、うんざりするほど小気味よい足音が近づいてきた。

マックスだ。

「来たわね？ スケアクロウ。また、いつもにましてシケた面してるじゃない」

マックスが思いつきり、俺の背中をつねる。三センチもある爪でこれをやられては……。
もはや一種の凶器だ。

「……疲れてるんだ」とだけ俺は答えた、というか呟いた、というか、口を動かした。

「あら！ お気の毒。でも、疲れた中をいくのが人生ってもんよね」

マックスが、早口の大声でたたみかける。

お前にだけは、言われたかない台詞だよ、という言葉は、口にせず飲み込んだ。

マックスに反駁するようなパッションなど、アレックスの尾行で消耗しきった俺には、もはや残っていなかった。

たとえ疲れていない日だったとしても、そして、そんな日がここ数年間、俺にあっただろうかということは別として、俺はマックスに、望んでまで会いたいとは思わない。

アパートメントの玄関ホールで顔をみかけるだけでも、十分すぎるほどだ。

「ねえ。また、抱き寄せてくれないの？」

俺の首に右腕を巻き付けながら、マックスはゆっくりと回転するようにして、左隣のスツールに腰掛ける。

俺はまるで、ストリップダンサーに絡みつかれるポールみたいな気分になった。

力を振り絞って、やっとマックスの腕から逃れると、俺は溜息混じりに言った。

「夕方言ってた、面白いことってなんだ？ マックス」

マックスは、やれやれといった表情を作って、持っていたハンドバッグをスツールに放り投げた。

「何？ やぶからぼくに。アタシまだ、飲み物も頼んでないのよ？

失礼な男ね」

俺の最後の力はここで尽きた。

もう、勝手にしてくれ……。

「……今日スケアクロウが尾行^{つげ}してた、あの『スケベおやじ』。わりに有名なのよ、その筋では」

ピンクジンで作らせたドライ・マティーニのオリーブを、これまた、ピンクとパープルのマーブル模様に禍々しいほど塗りたくった爪でもて遊びながら、マックスはすまして言った。

「見場のいい男とばかりと遊びたがるの。札幌^{札幌}らきって、イヤな感じよ。ハードなプレイが好きで、怪我^{ケガ}させられた男もいるって聞くし」

なるほど……。

タンブラーの中の氷が、小さく音を立てて動いた。

……それで、アレックス・ゴールドウインのバッグの底には、ハードな「ヴァイブ」が入ってたってわけだ？

マックスのコースターの脇には、スティールのピックが7本。やけに几帳面に並べてあるところが、そこはかとなく滑稽だ。

だが、7本のピックには、7つのブラックオリーブがついていたはずだ。

そして、その7つのブラックオリーブは、7杯のマティーニに添えられていたということである……。

大体、宵の口にチャーチストリートで会ったときも、しっかりと飲んでいやがったし。

一体全体。コイツは、どういう肝臓の持ち主なのだろうか。

俺はと言えば、まだ1杯目の白ワインを持って余っていた。それもライムのペリエで割ったやつだ。

あのメタルなバーテンダーのバーで、スコッチをシングルで一杯飲った以外は、アルコールは入れてないというのに。

「ワインのペリエ割」すら「駄目」な時のスペシャルレシピも、俺にはある。

「T・Cスペシャル」というヤツだ。

いっそ、そっちにしておけば良かったかもしれない。

「……そうそう、だからね、あのジジイは、もうああいうところじや、あんまり男の子が引つかからないわけよ」

マックスは8杯目を軽く飲み干し、グラスをバーテンダーに突き出すと、次のグラスを催促した。

アレックス・ゴールドウィンの「そっち」の趣味は、かなり筋金入りであることは、よく分かった。しかし……。

「そうは言うが、アレックス・ゴールドウィンには妻がいる」
俺はマックスに、水を向ける。

「スケアクロウったら、あんた。そんなの関係ないわよ、お馬鹿さんね……」

鼻で笑いながらマックスは、ピンクの剃刀のような爪のついた人差し指で、俺の頬をなぞった。

ナイフを頬に当てられたような恐怖で、背筋に悪寒を感じる。

「アレックスの『ご乱交』振りが、目立ち出したのっていつ頃からなんだ？ ええっと、『その筋』とやらでは」

「え？ さあねえ、どうだったかしら」
マックスは、バーテンダーの手から直接、カクテルグラスを受け取ると、ひと口啜って軽く眉をひそめた。
そして、バーテンダーに声をかける。

「ここ、二、三年ってトコじゃなかったかしらね？ 確か」

バーテンダーは、ブルネットでやや痩せぎみの中肉中背の男だった。生真面目な事務員のような風体だが、年齢はよく分からない。その落ち着いた印象から、俺は漠然と五十台前半くらいかとあたりをつけていた。

……と言うか、このバーテンダーも「その筋」だったのか？ それについては、かなり意外ではあった。

俺は、今度は両者に尋ねてみた。

「特定の恋人とかはいないのか？ アレックスには」

マックスは、バーテンダーと軽く目を合わせると、さあ？ と肩をすくめ、「そこまではねえ……」と首をかしげた。

マックスのマティーニは、「スーパー」ドライだ。

俺はマッチズモ連中の「マティーニ論争」のようなものには、興味はない。

マティーニの「ドライ」度合を競いたがるヤツには、本当に事欠かない。

ベルモットはグラスに入れたら、すぐに捨ててジン注ぐべきだ、とか、ジンを注いだグラスに、ベルモットの瓶をかざすだけでいいだ

とか。

はたまた、ベルモットは、飲むヤツがラベルを見るだけで十分だとか。

なんだかんだと、色々と言いたがる。

マックスの「スーパー」ドライ・マティーニのレシピは、次の通りだ。

シエーカにアイス、ピンクジンを入れ、シエーカの外側に薄く水滴が浮くくらいまで軽くシェイク。ソルトトッピングのカクテルグラスに注ぎ、ブラックオリーブを添える。

だが、これで完成ではない。

マックスのレシピはThe この店 Barでなければ、まず不可能なものだ。

なぜなら、マックスは、この店にはベルモットを1本も置かせていないからである。

つまり、ベルモットの「ラベルも見ない」という点において、「スーパー」ドライである、と言いたいわけだ。

「ハードボイルドよねえ……」などと悦にいらながら、マックスは飲んでいる。

しかし、そもそも「女装趣味のゲイのハードボイルド」という定義は、果たして成立しえるのだろうか？

こんなことを口にしようものなら、すぐさまマックスに、「ホモフオビア」のレッテルを張られることは、目に見えているから、当然、俺は、これまでそんなことを口に出したことはない。

だが、付け加えて言わせてもらおうなら。

そもそも、「マティーニ」という名前が、ベルモットの製造元の名前に由来している時点で、ベルモットなしのマティーニは、単なる「ジン・ストレート」なんじゃないだろうかというのも、俺の疑問ではある。

ブラックオリーブが付いてくるからマティーニ、って訳じゃなからう？

もちろん、これをマックスに言ったこともない。

「バーにベルモットすら置かせない」という横暴は、マックスがThe Barこの店のオーナーであるという一点によってのみ許されているのであった。

そして、マックスは、俺のアパートメントのオーナーでもある。

そう、十二月のこのトロントで、暖房が壊れるような、あのアパートメントのだ。

「で、なんで、あのデブハゲを追ってるわけ、スケアクロウは？」
9本目のオリーブのピックをコースターの横に置きながら、マックスは言った。

「依頼内容については、守秘義務がある」
俺は即答した。

「あら？ アタシは情報提供者じゃない？！」
そこまで威張られるほどの大した情報は、今のところ、俺には提供されていない。

「ま、あれね。どうせ、浮気調査とか、そんなところでしょう？」
マックスは、意外とシンプルに核心をついてきた。

「だって、あなたの事務所、シケてるもんね」とまで言い放ち、マックスはげらげらと笑う。

猛烈な眠気が押し寄せてきた。

俺は瞼をしばたかせる。もう二時半だった。

マックスは、まだまだ、コースターの横にピックを並べるつもりなのだろうが……。

さすがに、もう付き合いきれない。

マックスとバーテンダーに、アレックスについて何か噂を聞いたら教えてくれと言い置き、俺は店を後にした。

長い一日が、やっと終わった。

十二月四日(水) (1)

9

昨夜眠りに付いたのは、結局、午前三時を回ってからだった。

浮気現場を押さえることはできなかったものの、アレックスの「同性趣味」の徴候をつかんだところである。引き続き、尾行を続ける価値はありそうだ。

とは言え、アレックスに1日貼りつくのは、気が重かった。

尾行要員を臨時に雇うことも考えないではないが、上乘せされる経費に関して、「デブばばあ」がどれだけゴネるだろうかということ、容易に想像ができた。

それに、実際、大枚はたいしたところで、まともに尾行ができるパートタイマーなど、そうそう都合よく見つかるわけでもない。

とにもかくも、アレックス・ゴールドウィンに対し、妻であるアリッサ・デブばばあ・ゴールドウィンが、俺に提供した情報は少なすぎる。取りあえずは、張り付いてみるしか良い手はなさそうだった。

そういう事情で、俺は、午前六時に起床するはめとなった。

一般的に推奨される睡眠時間を得るには、かなり不適切な起床時間だ。特に、夜が遅かった場合には……。

オントリオ湖底に溜まった汚泥みたいな気分で、アレックスの自宅へと車を走らせながら、俺はダブルラージサイズのホットコーヒーを体内に流し入れ、カフェインの過剰摂取に努めている。

F Mラジオだけが、朝から元気に鳴っていた。
車内装備が前世紀後半の平均値である俺のフォードには、カーラジオくらいしか搭載がない。

ノー・カーナビゲーションシステム、ノー・ETCシステム。

東部標準時午前七時四分。

スポーツブランドの手袋とナイロンスーツ、ランニングシューズに身を包んだアレックスが、MP3ポータブルプレーヤのイヤホンを耳に押し込み、フードを被りながら自宅のから玄関から現れた。

手首と足首を数回まわすと、二、三回ほど中途半端な膝の屈伸をしてゆっくりと走り出す。

こんな高級住宅地では、この時間、まだ人影はまばらだ。車通りもほとんどない。

背後から薄汚いフォードが徐行運転で付いてくれば、アレックスにそれこそすぐにも警察を呼ばれてしまうだろう。

朝っぱらから、ランニングがてら浮気相手の元に転がり込むという展開は、まずもってありえないであろうが……。

迷ったものの、結局、俺は車を降りて尾行することにした。

公園かと思うような広さの庭が、おのおの標準的に装備されているような邸宅が建ち並ぶこの一帯を、数ブロック四方程度を一周すると、アレックスは自宅に戻った。

奴は、顔見知りにはさえも出会わなかった。

ノー・セックス、ノー・バイブ。

ジョギングの所用時間、約二十分弱。

アレックスが玄関の中に消えたのを見届けてから、俺は自分のフォ

ードに戻った。

歩いているのか走っているのか……。

俺の貧弱な語彙ではどう表現すべきか判らない速度のアレックスに尾いてまわったせいで、俺の身体はすっかり冷えきってしまった。

しかも、ヤツは体脂肪燃焼が開始すると言われる継続運動時間二十分が経過する前に、トレーニングを終了している。こっちだって身体が温まる暇もないというものだ。

おかげで、俺にはダブルラージサイズのコーヒーで、カフェインと水分を同時に摂取したことによる弊害が起きつつあった。

こんな住宅地では、周囲に「用」が足せそうなところもない。

しかも、俺は今一応、張り込み中だ。

思いあまつて、空になったコーヒーカップを「再利用」するという手段も考えたが、サイドミラーに傷のあるガタのきた車の中で、男がプラスチックカップに用を足している様を目撃されては、なまじ外で何事かをやらかしているよりきまり悪いこと請け合いだ。

少なくともアレックスは、これからシャワーを浴び、スーツに着替えるのだろう。

多少、俺には時間の猶予があるはずだ。

しばし逡巡したが、堪え切れず、俺はイグニッション・キーを回した。

ヤング・ストリートに出る直前で、やっとコーヒーショップの看板を見つけた。

ともかく、車を止め、俺は急いで中に入る。

「禁煙でセルサービス」という今時の店ではなく、カウンターにビールレザード貼りのボックスシートがあるような類の店だ。パンケーキやマフィン、ソーセージエッグなんかを食べられるような。

カウンターの中では、ウエイトレスが、気怠げにコーヒーサーバーをサーバウオーマーに載せ換えていた。オレンジがかった鶯色の髪を八十年代風に細かくカールさせ、総重量は九十キロ台後半級といった風だった。

俺は彼女に向かって片手をあげて注意を引いた。

そして、レストルームの方を指さしてから、急ぎ足で駆け込んだ。

神の御手により救済され、レストルームから出てきた俺を、先程のウエイトレスの方は、そのまま解放してくれる気はなさそうだった。礼を言いながら近づいていく俺を、すごい形相で睨み付けている。朝、仕事や学校に出かけていく人波を打ち眺めながら、大味なパンケーキを食べ、コーヒーを3杯おかわりするという時間の過ごしかたは、なかなか悪くはないと思う。

世の中を傍観しているようで、大した病気でもないのに、小学校を休んでしまった時のような心持がするはずだ。

そういう気分を味わってみるのは、決してやぶさかではない。

俺が、尾行中の探偵でさえなければの話だが。

そろそろ戻らないと、アレックスが家を出てしまう。

俺は「コーヒーを持ち帰り用カップに入れてくれ」と言いかけたが、同じ過ちを繰り返さす必要はないことに、賢明にも気が付いた。

結局、売れ残って一晩越してしまったような、べつとりと脂のういたブルーベリー・マフィンをひとつ買い、コーヒーショップを後にした。

急いでゴールドウィンの家まで引き返す。

残り2ブロックというところまで戻ってきた時、ベンツが対抗車線に左折してきた。運転席にいたのは、左の分け目からの髪の毛の流し具合に、薄い部分をカバーするための涙ぐましい程の努力の痕が認められるヘアースタイルになったアレックスだった。

俺はベンツとすれ違い、ルームミラーでナンバープレートを確認した。

そして、1ブロックほど直進し、左折してから、すぐに、Uターンして、アレックスのベンツを探した。

戻るのが、あと数分遅れていたら……。

とんだ下手を打つところだった。

車通りの少ない住宅地を抜けるまでは、アレックスに尾行を気づかれないか、少々不安だった。

だが、特に不審な動きもなく、アレックスのシルバーのベンツは、すんなりとシエパード・ヤング界限にあるオフィスビルの地下駐車場へと滑り込んでいった。

入口に陣取る防犯カメラと警備員が、決して部外者の無断駐車を許さないような類のパーキングだ。

東部標準時午前十時過ぎ。

ぼんやりとアレックスのオフィスの前を眺めやっていると、ふと、右のサイドミラーに映りこんできたものに、俺の目が留まった。

ロングのキャメルコートの合わせ目から、リズミカルに見え隠れするすんなりと伸びた脚。

きっかり膝上のダークブルーのタイトスカートの下は、ブーツではなく、足首に細いストラップのついたパンプスだった。

今年はまだ雪が少なめだとはいえ、塩と泥雪まみれの道を歩くには、勿体なさすぎるような高級靴のように見える。

脚を覆っているのは、黒いストッキングスだった。

十二月のトロントを歩き回るには、健気すぎるような装いの足元だ

が、あまり外を出歩く必要が無ければ、それでも支障がないのかもしれない。

薄手のストッキングスは、膝頭にぴったりと貼り付き、関節の動きが透けてみえた。

サイドミラーいっぱいに映りこんだ瞬間、キャメルのコートが、俺の肩口、サイドウインドーの横を通りすぎていった。

俺の位置からでは、彼女の顔は見えない。

脚だけでは女性の年齢は判らないものだ。特に素足でない場合は。

そして、美しい膝下を持つ女性は、その美しい形を、随分と長い間、留めておけるものだ。

経験上感じるだけなのだが、ハイヒールで美しく歩くことのできる女性は、それほどは若くない場合が多い。ピンヒールで軽やかに歩くには、それなりの経験が必要だからだろう。

彼女は、今度はフロントサイトに、そのうしろ姿を見せた。

歩調を変えることなく、流れるように先へと進んで行く。

おそらく、彼女が歩みを進めることに、排腹筋が引き締まって美しいラインを描いているであろう。しかし、残念ながら、それはロングコートに隠されている。

だが、一直線上をクロスするように進んで行く、彼女の細い足首はじつくりと眺めることができた。

我ながら呆れてしまおうが、十の頃から、俺は女の脚には弱いのだ。

十二月四日(水) (2)

10

俺がキャメルのコートのハイヒールに惚けていると、玄関から、中年の男が出てきた。間違いない。アレックス・ゴールドウィンだ。

相変わらず御丁寧ガーディアンに、警備員たちにも、営業スマイルを振り撒きながら、アレックス・ゴールドウィンは表へ出てきた。

そして、アクアスキュータムのトレンチの襟の中に、亀のように首を縮こめながら、歩いていく。

アレックスが通りを渡り、左折したのを見届けると、俺はエンジンをかけ、ゆっくりと発車させた。

チーム尾行なら左折先で、バトンタッチといったところであろうが、そこは弱小個人探偵事務所の悲しさだ。

残念ながら、俺のバトンを待つ二番手走者は、誰もいない。

俺はウインカーを出し、続いて左に曲がる。

目の前の歩道の二十メートルばかり先を、アクアスキュータムが歩いている。

すぐに追いつきそうになり、俺は手近のパーキング・メーターの枠に、フォードを滑り込ませた。

アレックスは、目の前のコーヒーショップへ入っていった。

緑色と黒色のロゴが目立つ、アメリカのフランチャイズだ。最近あちこちにできているが、俺は、ほとんど入った事がない。

なぜかって？ 店の前にこう書いてある。

「禁煙」。

コーヒーを飲むのにタバコが吸えないとは！ お笑いぐさというものだ。

この店で、浮気相手とあっているとは思えないが、一応、アレックスがここで、どんな人間と顔をあわせるのかくらいは、調査書に書いておいてもいいだろう。

ヤツが注文の列の最後尾についたのを確かめ、俺は車を降り、店に入った。

さすがにアレックスの真後に並ぶのはためらわれた。

トナカイの角のついた帽子を被った熊のぬいぐるみと一緒に売られているコーヒー豆などを物色するふりをして、俺はタイミングをはかった。

店内を見回すと、オフィス街だけあって、トロント中どこにでもいる観光客もさほどは目につかない。

アレックスが、泡とマシユマロとシロツプ入った、英語とイタリア語が強引に合体させられた長たらしい名前の品物を注文し、歩きだしたのを見計らい、俺もレジカウンターに向かった。

ペルシャ風のくつきりとした容貌の若い店員が、とてつもなく元気に挨拶してくる。ぐいっと手元のメニューを押し出しながら、男は、俺の注文を待つ。

どれも同じロゴ入りのカップに入っていて、中身がろくにみえない写真なのだから、こんなもの必要ないじゃないか？ 言いたくなるようなメニューだ。

俺は何を頼むべきか、途方にくれた。

キャラメル・ジンジャー・カプチーノ・フラペチーノ……。

せめて、何語を使うのか統一してくれないだろうか、いや、そもそも

も、コーヒーに生姜とマシユマロをいれるのは、どこの国の習慣なんだ？

店員の笑顔がひきつり始めたのと、俺の後ろに並ぶ客が3人に増えたことの相関関係を感じとった俺は、とりあえずメニューの一番目にあつたものを注文した。

「サイズは？」とペルシャ系に訊ねられ、スマールと答えたところ、「シヨート一つですね」と再確認された。

……シヨート。

一番大きいサイズが「トール」だったら、それも判るが？

最も大きいのは「グランデ」だか「ヴェンティ」らしいのに？

やっと会計をすませたところ、品物はその場で手渡されなかった。

奥の赤いランプの下の台から出すから、そこで待てとのことだ。

カウンターの端には、瑠璃色シェードのペンダントライトとオレンジのそれが下がっていた。その下には数人の客が、注文の品の出来上りを待っているようだ。

俺はオレンジのライトのあたりに、レシートを持って立った。

店員が、できあがつたコーヒーの名前を呼ばわっている。

「シヨート・キャラメル・モカ2つ」とか「グランデ・ソイラテ」とか。

もし、前後でトール・ソイラテとやらを頼んだ人間がいたとしたら、どっちが先に注文したかわからないのではないのだろうか？

待っている客の方も不安なのか、店員が出来上がりのコーヒー名を呼ぶたびに、急ぎ足で一直線にカウンターに近づいていく。

「シヨート・ラテ一つ」と呼ぶ声がした。

俺は、レシートを確かめるとカウンターの方へ向かった。

すると、ダークブラウンのロングヘアの女性が、ほとんど俺と同時に店員に手を伸ばした。

俺は、とっさに手を引つ込め、彼女に譲った。向こうが先に注文していたのかもしれないと思ったからだ。

しかし、その後「ショート・ラズベリー・ジンジャー・ラテ」だの「ショート・キャラメル・モカ・マキアト2つ」だのが続き、俺はしばらくの間、きまり悪い思いをしながらその場に、立ち尽くすはめになった。

「ショートのソイ・ミルクラテ1つ」と店員が呼ばわったが、誰も取りにいこうとしなかった、更に店員が呼んだが、誰も出なかった。俺は、さつさとカウンターに近づくとそれをひきとった。

注文したものは、まったく違うが、この際、もうどうでもいい。大方、さっきのロングヘアが注文したものだろう。

さつとしないと、アレックスが自分のキャラメルなんかかんとかを飲み終わって、店を出て行ってしまふ。

俺は、店内を見回し、席を探すふりをして、アレックスに近づいた。ヤツの脇を通ってその奥の席に座ることにした。

アレックスの手前、あと4歩といったところまで近づいた瞬間、ヤツが顔を上げた。

そして、やけに愛想のよい笑顔を浮かべると、いきなり俺に話しかけてきた。

「やあ、苦労していたようだな？」

知らない人間に、世間話を仕掛けるための、最高のタイミングをはかっていたといったところか。

さりげなさの演出が、逆に、妙な白々しさをかもしだしていた。ヤツは何か気づいて、確信的に声をかけてきたのだろうか？

俺は、ともかく曖昧な相槌で、アレックスに答えておくことにした。「ああ、そうかな？」

こんなにあっさり尾行対象に顔が割れてしまうとは。

我ながら、なんと間抜けなことを。

そんなことを頭の半分で考えながらも、もう半分では、元々気に染まない依頼だ、もうこれでどうにでもなれと、開き直っていてもいた。

「ピックアップに手間取っていたらどう？ スтейツのこの店じゃ、注文して横のカウンターをみると、もう自分のラテができていて、すぐさま受け取れるんだ。ランプの下で、ぼんやり待つ必要なんかないのさ。こっちはまだまだだな」

アレックスは、これまた朗らかな様子で返してきた。

なんとなく、自慢話の相手を探しているだけのようにも見える。

本来、尾行の相手と顔を突き合わせて話をするなんてことは、まずあり得ないのだが……。
まったく。「何とかラテ」のせいで大変な事になってしまったものだ。

俺は自分のソイラテとやらにひとくち口をつける。猛烈な豆の匂いが口いっぱいに広がった。

おもわず顔をしかめた俺をみて、

「何を頼んだ？」とアレックスが訊ねてくる。

「カフェラテ、だ。……ミルクは、ソイ^{豆乳}ミルクらしいが」と答える
と、アレックスは、これまた、ファミリードラマのコミカルシーン
よろしく、肩をすくめてみせた。

「健康志向なんだな、それともベジタリアンか？ ソイミルクだけは、飲むとは思わんがな」

アレックスの飲んでいる「キャラメルなんか」の甘ったるい匂いが、俺の方まで漂ってくる。

コーヒーを、そこまで高脂肪、高カロリーにする必要性というものも、泡立てた豆乳をコーヒー入れるのと同じくらい、俺には理解できないことだった。

俺の目を見ると、アレックスは、唐突に右手を差し出した。

「アレックス・ゴールドウインだ」

こいつは、街中のコーヒーショップでいちいち大統領選の候補者みたいに、自己紹介の握手をやりまくる趣味まであるんだろうか？

「ウイレム。ウイレム・オースター」と答え、俺も仕方なく手を差し出した。

(ポール・オースター+ウイレム・デフォー) ÷ 2つてとこだ。

「やあ、ミスター・オースター、アレックスと呼んでくれ。ビルと呼んでも？」

というか、なんで、コーヒーショップで会っただけのお前を、「アレックス」などと呼ぶ必要があるのだ、俺に？

いや、その前に、ウイレムは、普通「ビル」と呼ばれたくなくて使う名前なのだが。

……やはり、コイツはゲイだ。間違いない。

俺は、直接の回答をする代わりに、「この辺で働いているのか？

……アレックス」と訊ねた。

これは、かなりヤツを喜ばせた質問のようだった。

左手をちよつと額にかざし、うつむいてみせると、「ちよつとした、デリバリーの会社をやっていてね」と言いかけ、ワンセンテンスの途中で一息ついた。

そして、アレックスは先を促せとでも言うように、俺を見て、また愛想笑いをした。

「……ああ」

相槌としては、俺はとりあえずこれくらいしか言う事を持ち合わせていなかった。しかし、アレックスは、それでも十分に満足したようだった。

なぜならヤツは、それに続いて、滔々と自分の話を始めたからである。

「ちよつとした、デリバリーの会社」とやらが、どういった大手顧客に文具を配達しているのか。

オフィス用品のデリバリーが、いかに先見の明のある思いつきであったか。

多角経営で始めた不動産業が、いかにトロントの土地バブルにのっているか。

さらには、自宅に新しく入れた最新式の冷蔵庫の自慢にいたるまで、訊ねもしないのに、それは延々と続いた。

もはや、アレックスは、俺の間の抜けた相槌さえ必要としていなかった。

時間の経過とともに、ますます大豆臭のひどくなるソイラテをもて余しながら、俺は水を一杯飲めたらなということだけを、考え続けていた。

アレックスが自慢話を始めてから、きっかり5分ほどたった。唐突に、アレックスは左手首のロレックスをちらりと出して眺めると、

「申し訳ない、そろそろ会議の時間なんだ。これで失礼するよ」と言い、立ち上がった。

さりげなくロレックスを、見せびらかしたつもりか、はたまた時間に追われるエクゼクティブを演出したかったのか。

そして、すぐさま歩き出さんばかりの様子で、右手を差し出し「話せてよかったよ、ビル」とだけいうと、俺の手をすごい力で握りしめ、さっさと店を出て行った。

俺は、まるで、路上でやり逃げされた「ぼけなす」のように、呆然とその後ろ姿を見送っていた。

話しかけてきて、喋くりたいだけ喋くると、まるで俺が引き止めていたとでも言う様子で、立ち去るとは……。

こういった精神的レイプを、意識的にか、無意識的にかは知らんが、平然と行えるところは、さすが「デブばあ」の夫だけのことはある。

似た者夫婦というべきだろう。

腹立ちを通り越し、呆れ果てた後、俺は奇妙に感心すらしてしまう。

しかし、これだけはつきりと、対象者と顔を突き合わせてしまったのは……。

尾行は、かなりやり辛くなる。

基本的に浮気調査なんて、最初は対象者の後を付回すくらいしか手はないものなのに。

俺は、今後の展開を考えると気が重くなった。

せめて、アリッサ・デブばあ・ゴールドウィンが、アレックスの日常に關してもう少しましな情報を持っていてくれれば、尾行するにしたって効率的に事を運べるのだが。

とにかく、この「ソイラテ」とやらの、豆くさい匂いにはうんざりだった。

口直しのコーヒーを飲んで、タバコを吸えば、頭もしっかりしてくるだろうか。

そして、どうせついでなのだからと、俺は移民局に立ち寄ることにした。

ノースウッドに出す最終報告書に添付しなければならない書類があるのだ。

お仕着を着たアレックスのオフィス前のガーディアンが、犬の首輪をチェックするありさまを、午後中、見続ける必要も、もう、あるまい？

十二月四日(水) (3)

11

移民局での用事は、存外、順調に片付いた。

明るい金髪をクルーカットに刈り上げた、細い銀縁眼鏡の担当者は、二十代前半に見えたが、きびきびとキーボードを操作し、仕事をこなすと、必要な書類を素早く出してきた。

おかげで、俺は納税者として、役所業務IT化のメリットを多少なりとも享受できた気分になった。そして、移民局のパーキングにフォードを置いたまま、俺はコーヒーを買いに行くことにする。

公共施設の有効活用。納税者として、当然、有する権利だろう？
何も一日中置いておくというわけじゃない。

数年前の法改正以降、トロント市街のレストランでタバコを吸うのは、ほぼ不可能になっている。

喫煙者は、特にオフィス街での生存率低下が原因で、レッド・データ・ブックへの掲載が確実視される種のひとつとなった。

このあたりでも、絶滅危惧種達は、敷地の一角に申し訳程度に作られた喫煙スペースで、肩を寄せ合って煙を吐いている。たとえ、マインス二十度まで気温が下がる1月半ばの雪の中でも、吹きさらしの小さなひさしの下にしか、その存在は許されない。

コーヒーとベーグルの入った『タイムホートンズ』の紙袋を持って、俺も手近の灰皿に向かった。

ランチを終えたオフィスワーカーが、思い思いの店のテイクアウトコーヒーを手に、食後の一服を堪能している。俺は立ったまま、ベー

グルサンドをコーヒーで流し込みながら、彼らの話を聞くともなく聞いていた。

明るい紺色のストラップのついたIDカードホルダーを首に提げた中年の男たちが、愚痴っぽい口調で話している。

ひとは『ピーナッツ』のウッドストックみたいな形の薄黄色の髪もうひとは、バーでのビールを三十%程減らしてもよさそうな腹周りが、コートの上からでも分かる。

彼らは、書式の印刷を発注している業者の仕事ぶりに、色々と難癖をつけているところのようだった。

サンドイッチの包み紙とペーパーナプキンを紙袋に突っ込み、ねじって細長くする。上着のポケットにそれを押し込み、俺はタバコを取り出した。

ビルの谷間で風の通り道だった。なかなか火が付かない。

すると、ショートヘアの中年女性が手をかざして、風を遮ってくれた。

身長は俺より十センチほど低かったが、身幅のほうは俺の倍はありそうだった。いずれにせよ、女性としてはきわめて大柄だと言って良からう。圧倒的な存在感とオレンジみtainな明るさを持っているタイプ。

ちょっと申し訳ないが、俺はオランダの牝牛、といった印象を持った。

そのがっしりとした体がしっかりと風除けになって、すぐに火は付いた。俺は軽く額に手をかざし、彼女に礼を言う。

二言、三言、俺は牝牛と、昨今の喫煙者の肩身の狭さを嘆きあった。彼女は役所勤めのようなようだった。世間話のやり取りが意外に弾んできたところで、同僚から呼ばれ、牝牛は去っていった。

風除けがいなくなり、冷気が骨身にしみる。俺もこのわびしい灰皿から引き上げることにした。

*

東部標準時午後五時十七分

アレックスはエグリントンの自宅に戻った。

アリッサ^{II}デブばあ・ゴールドウィン夫人をエスコートし、アレックスが、ふたたび玄関から現われる。

両名が、シエラトンホテルのヴァレー・パーキングにベントを預け、ターバンを巻いたドアマンが恭しく開いた扉の中へと消えていくのを見とどけた時、俺は今日の尾行を終了することに決めた。

今日も、アレックスに関してはまったくもって、何の成果も得られなかった。だが、ノースウッズの雑用が片付いた点は良しとしよう。

移民局で取ってきた書類と共に、事務所に戻ることにする。

シエラトンホテルというわけにはいかないが、俺も何か栄養をつけることにしよう。ここ数日、ろくなものを食べていなかったことにいまさらながら気が付いたので。

『フィッシュヤーマンズ・ワーフ』のパーキングに入ろうとして、俺はブレーキを踏んだ。

七、八人の歩行者が、身振り手振りを交え、大声で何かを喋りながら歩道一杯に広がり、のろのろと歩いていたので。

歩道に右車輪だけ乗り上げたまま、そいつらが流れていくのを待つ。マーカム・スタンレーのところのスタッフだろうか。『フィッシュヤーマンズ・ワーフ』の煮えたぎったコーヒーが、彼らのお気に召すと良いが。

パーキングのいつものロットにフォードを押し込み、俺は、運転席のドアを叩きつけた。サイドミラーに光っている銀色の傷がやたらと目に付き、癩に障る。

『フィッシャーマンズ・ワーフ』の切れかけたネオンが点滅している。ごく細かい雪がちらつき始めていた。

俺は両手をポケットに突っ込み、小走りでビルの裏口に飛び込んだ。今日の7本目に火をつけながら、階段を3階まで上がる。

マーク・スタンレー達は、やはり出払っているようだ。ビルは静まり返っていて、俺の足音だけが響く。巻紙の燃える音まで、はっきりと聞こえるほどだ。

3階のホールについた時、廊下の突き当たり、丁度、俺のオフィスの前の薄暗がりには人影が見えた。

向こうは、足音で、誰かが上ってきたことに気付いたようだ。こちらをじっと窺っている。こっちは逆光で、その姿はよく見えな

い。

その人影を見据えながら、俺はゆっくりと近づいていく。

「俺のオフィスに御用ですか？ ミスタ・スタンレー」

ポケットからキーリングを取り出しながら、ドアの前にいるマーク・スタンレーに近づいた。マークは、狼狽しているように見えた。

「どうも、リードさん。今日はずっとお留守だったんですね」

マークは、相変わらずゴム鞄のような声で答えたが、内容は全くの思いつきといった感じだった。

そして、急にまたハイな声になると、「そうそう。マーカムでいいですから、リードさん」と付け足した。

俺がリードではないことを訂正するのは、相変わらず面倒だった。鍵を開けるため、さらに近づくと、マーカムはわざとらしくドアの前から自分の身体をよけた。しかし、まだその場に佇んでいる。

俺は無言でマーカムの顔を見詰めた。まだ何か？ という意味を込めてだ。

マーカムは、電源スイッチが入った瞬間の蛍光灯のように、再び喋り始めた。

「スタップの連中は、休憩で出払ってましてね」

「ええ。さつき大勢で『フィッシャーマンズ・ワーフ』に入っていくところを見かけました」

俺は、鍵を回し、ロックを外した。ドアを数十センチ押し開けたところで、また、マーカムが言った。

「あの店には良くいらっしやるんですか？ リードさん」

俺は右手でドアを支えながら、キーリングをポケットに入れる。

そして、くわえ煙草のまま「まあ、そうですね。近所には他に店もありませんから」と答えた。

「どうですか？ その……味とかのほうは。お勧めですかね？」
マーカムは、なおもどうでもいいようなことを聞いてくる。

俺は溜息のように笑うと、「ミシユランの星はないですがね、食べられないようなものは出ないかと」と言い、ザリガニが嫌いじゃなければな、と心の中で付け足した。

「ああ、ああ」

マーカムは、突然虚ろな声になって、曖昧な相槌を返す。

会話を終えたいという意図を込め、俺は少し声を張った。

「まあ、スタンレーさん達のお口に合うかどうかは、実のところ良く分かりかねますがね」

では、と話を区切って、俺は部屋の中に入る。そして、まだその場につっ立っているマーカム・スタンレーの鼻先でドアを閉めた。

ドアの側に立ち、外の廊下の様子を伺う。しばらくしてマーカムが、そこから離れる気配がした。

向かいのオフィスのドアが開いて、閉まる。マーカムは自分のオフィスの中へ入っていったようだった。

すかさず、俺は部屋の中をざっとチェックする。細工されたり、力を加えられたりしたような痕跡は、特に見当たらなかった。

俺の留守中、オフィスのドアの前にいたマーカム。明らかに不自然な様子だった。

まるで、人目がなくなるのを待って、ここに忍び込もうとでもしたようではないか。

だが、マーカムと俺に、何か接点があるだろうか？

ハリウッドがらみの仕事なんぞ、まるで縁がないし……。

書類仕事は明日に持ち越すことにした。俺は、移民局から取ってきた書類をきつちりと金庫に入れる。念には念をいれ、PCのロックを再度確認した。

そして、アンサリング・マシーンを見たが、メッセージは1件も無かった。

明かりを消し鍵をかけ、俺は部屋を後にした。マーカムはまだオフィスにいたようだった。

ダストシュートに、今日の7本目の吸殻を投げ込む。

俺は階段を駆け降りた。

十二月五日（木） （1）

12

何かまともなものを食べようと思い、昨晚は『ケグ』でプライム・リブを食べた。

『ケグ』にしては、味も焼き加減も申し分なかったが、付け合せのマッシュポテトが少々胃にもたれた。特にローストガーリックがまズかったようだ。

数年前までは、14オンスくらいの肉を食ったってどうってことなかったという記憶はある。

幸運もあった。

どういう訳か、奇跡的に、フラットの暖房が改善されていた。

おかげで、昨晚は、寒気で夜半に目を覚ますことがなかった。これが恒常的な現象となることを、俺は祈らずにはいられない。

こういう事情で、今朝、六時過ぎに起きた俺は、ふたたびアレックスの「ジヨギングもどき」に付き合えるくらいの元気を取り戻していた。

洗面所の鏡の、湯気の間隙に映る自分の顔を見ながら、顎を擦る。無精した髭がだいぶ伸びている。

昨晚は『ケグ』の案内係に追いつかれずに済んだ。だが、これではまるで、留置所帰りの容疑者といった風情だ。

『シエラトン・ホテル』のメインダイニングには、ダイナースのプ

ラチナカードをちらつかせたって、決して通してもらえないだろう。今日は剃刀を忘れずに買って帰らなくてはなるまい。

卵は、あとふたつ残っていた。だが、そいつらが冷蔵庫では、かなりの長期滞在者だったことに、俺は気が付く。食べないのが得策だろうと判断を下した。

ガスレンジの湯が沸いた。

マグカップにティーバッグを放り込もうと箱を開ける。隅に粉になった紅茶の葉が少しついていてだけで、箱は全くの空だった。

俺はヤカンの湯を流しにあけて、とっとと出かけることにした。

フラットの玄関をでると、丁度、除雪車が通り過ぎていくところだった。俺はフロントガラスとドアに固まっている雪の塊を払い、運転席に乗り込んだ。

4回、キーをまわしたところで、エンジンがかかる。

俺はハンドルに両腕を持たれさせ、そのままアクセルを踏みつづけた。

車道を走る車両は、まだ少なく、街は静かだった。

とはいえ、俺が漠然と想像する『早朝の街』というものよりも、ずっとひと気がある。

通りには、静かながら不思議な活気のようなものも感じられた。朝の早い仕事をしてる連中って、結構いるものだなと思いつつ、今日の一本目のタバコに火をつけた。

一息吸い、煙を吐き出し、俺はサイドブレーキを下ろした。

*

昨日より十分ほど遅く、アレックスは玄関ポーチから降りてきた。そして、昨日とは色の違うナイロン製のスポーツウェアを身につけている。

俺は二本目のタバコを灰皿に押し付け、アレックスが十分に遠ざかっていってから、車を降りた。

アレックスは、おおむね、昨日と同じペースでのろのろと移動している。

時折、思い出したように腕を大きく前後に振ってみたりする。

腕を回すアレックスの袖口から、白っぽく細かい何かが舞い散った。

雪か？

いや、そうではないようだ。

風に飛ばされ、ほとんどはどこかにいつてしまっていたが、道の上に落ちていくつかの紙片は、拾い上げることができた。

小さく引き裂かれた写真……？ 雑誌の切れ端のようなものに見える。

黒っぽいような灰色のような何がかわからないものの中で、ひとつ、ふたつは金色や肌色の部分がある。

人物を写した物のようにも思えたが、これだけでは全く判別がつかない。

まあ、色々考えるのはいつでもできる。

とりあえず、俺はポケットにいつも入れてあ、チャック付きのビニ

ール袋に、紙片を入れた。

二十分弱のジョギングを終え、自宅の玄関ポーチに戻ったアレックスを見届けて、俺は自分の車に乗り込んだ。

冷えてかじかんだ手を自分のズボンのポケットに入ると、寒気が余計に身体に染み渡った。

ポケットに入れた俺の手が、大分温まってきた頃、ガレージの電動ドアがゆっくりと開く音がした。

エンジン音、そして、タイヤが道を擦る音に続いて、銀のベンツSクラスが走り過ぎて行く。

俺は今日2本目をくわえた。

身体をひねってズボンのポケットからライターを取り出し、火をつける。そして、キーを回し、俺のファクティバを発進させた。

昨日、俺が駆け込んだコーヒーショップを脇を通り過ぎる頃には、アレックスのベンツとの間に、大分、車が合流してきていた。

ごくあっけなく、アレックスの車は、今日もオフィスビルの地下駐車場に吸い込まれて行く。

俺も、このまま自分のオフィスに向かうことにする。

今日はノースウッドに最終報告書を提出してしまわなければならぬ。

アレックスのオフィスの前をそのまま通り過ぎ、1ブロックほどヤングストリートを下ってから、俺は左折した。

郵便受けから取り出したダイレクトメールと請求書の山を仕分けながら階段を上がっていくと、上からにぎやかな物音が聞こえてきた。三階のホールには、コーヒーとミルクのにおいが立ち込めている。

廊下で、白いプラスチックの蓋の付いた大きな紙コップを両手に持った黒髪の女性に挨拶される。

この間、ぶつかりそうになったオリエンタルの女性だろうか？ 違
うかもしれない。

すると、開け放たれたオフィスのドアから、マーク・スタンレー
が、わざわざ顔を見せる。

水色の目をきらきらさせながら、「コーヒーでもいかがですか？」
と明るく声を弾ませた。

……今朝は「1錠多め」に飲んできたってところか？

俺は右手を軽く上げて、コーヒーを辞退すると、左手をポケットに
入れ、キーリングを取り出す。

さつきからジョークをまくし立てては、ひとりで笑っているプロザ
ック・ハイなマークを無視し、俺はさっさとオフィスの中へと入
っていった。

昨晚のマークの不審な様子を、俺はあらためて思い出す。後手で
ドアのロックを掛けると、念のために再度、ざっと部屋の様子に視
線を走らせた。

新聞を椅子に投げ、PCの電源をいれて留守番電話をチェックする。
金庫のロックを外し、昨日、役所から取ってきた書類を取り出した。

部屋には、特に異常なさそうだった。

起動音からしばらくは立ち上がらないPCの横に書類を置き、俺は
棚からマンデリンを取り出した。

開けて数日が経ったが、まだ香りは十分に残っている。

昨日買ったペーパーフィルターの袋を破り、1枚取り出す。きつち
り端を折り込んで人差し指と中指、親指の腹でフィルターの端をつ
まんでフィリップスのドリッパーにセットした。

スプーンにたっぷり4杯。粉をフィルターに入れ、スプーンの柄で

真ん中をわずかに窪ませる。
冷蔵庫から水を取り出してタンクに注ぎ、俺はフィリップスのスイッチを入れた。

メーラーを立ち上げ、回線に接続に行く。

昨夜、メールを取りこんでおくべきだったと、俺はひどく後悔した。1日開けなかったただけなのに、バカみたいな未読件数が表示されている。思わず声を立てて溜息をつく。

そして、俺は肘掛椅子の背に寄りかかって、新聞を開いた。

各紙とも一面記事は、前法務大臣だった現産業大臣と総理大臣に対し、連邦議員からの問責が持ち上がっている話だった。

銃器の登録制に費用がかかりすぎていることに対する非難だが、裏は若手のリベラル派とガン・ロビーがタックを組んだという話のようだ。

問題の登録制度に関しては、予算の追加措置を講じると、総額で十億ドルを超えるという話だ。

なるほど、非難に値するなかなかの金額と見えよう。

マグカップにたっぷりとマンデリンを注いでから、俺は椅子に座り直し、新聞を捲る。

2杯目のコーヒーを飲み終え、『グロブ・アンド・ザ・メール』のエンタテインメント欄にまで、目を通し終わるまで、俺はぐずっていた。やりたくないレポートを後回しにしている学生のようなものだ。

煮詰まってきた3杯目のマンデリンをマグに注ぎ、俺はやっとデスクに座った。

ワードプロセッサのテンプレートを開き、報告書を仕上げていく。キーボードを叩く指がスムーズに動きはじめた頃合いを見計らった

かのように、電話が鳴った。
舌打ちしながら、受話器を取る。

電話はノースウツドの担当者の秘書からだった。
報告書のやんわりとした催促だ。
俺は最終の報告書を、今仕上げている旨を告げる。

秘書は、ブルネットでインド系の美青年だ。鹿のようにうるんで大きな目をしている。
もし、彼が雌豹のようになやかな脚を持つ美女だったら、ノースウツドからのつまらない下請け仕事にも、もう少しは身が入るだろうか？

4本目のタバコを吸い終わった午後1時過ぎ、やっと報告書が仕上がった。
黄色のコーティング紙でできたマチの大きな書類封筒を、キャビネットから取り出す。
移民局の書類とプリントアウトしたばかりで湯気の出そうな報告書を封筒に詰め、蓋の紐をぐるぐると止め具に巻きつけた。

十二月五日（木） （2）

13

報告書を届けがてら、昼飯を食いに行くことにする。

上着を取って袖を通し、読み残した新聞と黄封筒を脇に抱え、俺はオフィスを出た。

マーカムのオフィスは、ドアが閉められており、人の気配がない。皆どこかに出払ってしまったらしい。三階のホールも静まり返っている。

ロケとやらは、実際、どこで行われているのだろうか？ というような事を考えながら、俺は階段を下りる。玄関ホールには出ずに、パーキングに面した裏口に向かった。

『フィッシュヤーマンズ・ウィフ』は、いつもどおりだった。いつもどおりまばらな人影が、いつもどおり食後の煮えたぎったコーヒーを飲んでいる。

カウンターの向こうにいたポーが俺に気がついて、一瞬、声を立てて笑った。

俺は今日5本目のタバコをくわえ、カウンターの隅のトレイに積んである端の欠けた灰皿をひとつ手にする。

ポーが、いつもどおり嬉しそうな顔をして、ビニールシートに入った年季物のランチメニューを持ってくる。

こんな物、わざわざ持ってこなくたって、俺は『フィッシュヤーマンズ・ウィフ』で置いてあるビールの銘柄まで判るのだが、ポーに

は、自分の給仕の手順を客に合わせて変えるということとはできない。俺は受け取ったメニューを、一応、形だけ見てポーに聞いた。

「今日は魚は？」

ポーは、人まねを始めたばかりのオウムのように即答した。

「ランチセットは、ツナステーキ七ドル五十、シュリンプカクテル サラダ八ドル、フライド・

フィッシュ・サンドウィッチ七ドル。コーヒー付き」

親父がキッチンのシンクのところから、「ツナは終わりだ」とわめいている。

もしかしたら、ツナステーキなど、はじめから作っちゃいないのかもしれない、俺はそうも思った。

俺は、ポーにサンドウィッチとクラムチャウダーを注文した。

ポーは几帳面に伝票にボールペンを走らせていたが、ぴたりと手を止めて首を振った。

「クラムチャウダー、クラムチャウダー」

「今日のチャウダーは、何？」俺はキッチンの方に声をかける。

ポーがすかさず「コーンチャウダー」と答える。

俺が改めてコーンチャウダーを注文すると、ポーは満足げに何度も頷く。

伝票を書き終わり、メニューを俺の手から引っこ抜くと、ポーはキッチンへと戻っていった。

くわえたままだったタバコに火をつけて、ぼんやりと煙が昇っていくのを眺める。

親父が奥のテーブルにコーヒーを注ぎがてら、俺の横を通り過ぎる。
「例の『オットセイおばさん』の仕事はどんな具合だ？」

俺は、煙を一息吐いてから答えた。

「親父さんはご存知無いかもしれないがな。オントリオ州には『探偵及び警備員法』第二十四条という規定があつてね。探偵として入手した情報は、漏洩してはならないっていう内容なのさ」

親父はばかばかしいと言わんばかりに鼻息を立てると、奥へと消えていった。入れ替わりにポーが、コーンチャウダーのボウルを運んでくる。

トレイを両手でしっかりと持っているその様子は、金魚の入った水槽をリビングルームでひっくり返して母親にこっぴどく怒られた子供が、同じ失敗をしないよう細心の注意を払っている様子を思い起こさせられる。

チャウダーは相変わらず、地獄の谷から汲んできたように煮えたぎっていた。

俺はポーに礼を言い、尋ねた。

「ミズ・ゴールドウィンに俺のこと紹介してくれたんだってな、ポー？」

ポーはスプーンをボールの横に置くと「ミズ・アリッサ・ゴールドウィン！」と悲鳴に近い声を上げた。

そして、嫌そうに何度も名前を呟き続ける。

「ポーも、あいつが苦手か？」俺が重ねて聞くと、ポーは「タイムカード、タイムカード」と言いながら、キッチンに戻って行った。

ポアの持つてきた煮えたぎったコーンチャウダーを、匙でかき回して冷ましていると、奥のテーブルにコーヒを注いできた親父が、またこちらにやって来た。

「あの『オットセイはあ』のヤツ……俺がポアの雇用者税控除目当てで、雇つてるといわんばかりだな。ネチネチうるさいつたりやありやしない。おまけに補助金のちよるまかしの疑いまでかけやがった」

親父は、シヨットグラス1ダース分の『テイキーラ早呑み競争』を3セットばかりやった後、ケンカをおっぱじめた船員といった形相でわめき始める。
だが、アリッサについて、俺に文句を言うのは筋違いというものであるう？

「障害者を不法に雇用して、人権侵害してるって指摘された訳だ？」俺は笑いながら言つてやった。

「当たらずとも遠からずって言わないか？ そついうの」

親父には冗談が通じなかつたらしく、凶暴な形相で睨み返してくる。
「ポアの時給は、最低賃金プラス1・5ドル出してる。なのに、オバーワークのペイが1回もない事やらなんやら、言いがかりつけやがって、あのバアさんは！」

「そりゃ、ポアにチップはずんでくる客もいないだろうから、最低賃金じゃあんまりだろう」俺は大分冷めて食べ頃になったコーンチャウダーを口に流し込む。

「その代わり、ヤツは昼、きっかり休んでやがるし、朝も決まった時間にしか来ない。夜だつて、どんだけ忙しくて、さつさと帰らせてやつてんだ」

というか、ポーは決まった時間通りに生活できないと、パニックを起こすのだから仕方がない。

「病気休暇だつて、制限なく取らせてやってんだ」親父は付け足す。まあ、ポーが病気で休んだなどということは、俺はこれまで聞いたこともなかったが。

「ろくに、ポーの事を知りもしないソーシャルワーカーごときに、ごたごた杓子定規なことを言われる筋合いはない！」
親父はそう捨て台詞を吐いてキッチンへ戻り、激しく食器の音を立てた。

俺は、吸いさしのタバコをくわえた。すると、ポーがフィッシュ・サンドイッチを持って現れる。

まず、チャウダーのボールを横に除けると、ポーはご丁寧に、フォークとナイフをそれぞれ左と右にセットした。

そして、サンドウィッチの皿を両手で持ち、この上なく丁寧に置いた。俺はポーに、再度礼を言う。

サンドイッチを手づかみにして、かぶりついた。

中のフライは一応、揚げたてのようで、衣はかりかりとして、身は柔らかく、口が火傷しそうに熱かった。

今日は、なかなか「当たり」だ。

ポーは、まだテーブルの側に立ったままだった。奇妙な笑顔を作っている。

「どうした？」声は出さずに表情でそう問いながら、俺はポーを見上げた。

すると、ポーは突然、顔をしかめ「タイムカードを押しなさい！」と叫ぶ。

顔にクエスチョンマークを書いて見せて、俺は親父の方を見やる。

コーヒーカップと、サーバーを持って、親父がこちらにやってきた。

親父がかいつまんで話してくれたところは、こうだ。

アリッサ「デブばあ・ゴールドウィンは、障害者雇用者税控除を申請している『フィッシャーマンズ・ワーフ』の親父に対し、税控除申請自体の問題はともかく、そりゃそうだ、そいつの所管は税務署だ。障害者雇用の運用が適正に行われているかどうかのチェックにきた。

ポーと長い付き合いだった前任のソーシャルワーカーが退職したため、デブばあは、初めて『フィッシャーマンズ・ワーフ』に足を運んだってわけだ。

ここへ来るなり、デブばあは、くだらない質問をしまくったらしい。

前任者の残した引継記録くらいはあるはずなのだが、オットセイは、他にも担当が多いこと理由に全くそれらには目を通していないらしい。

しかも、面倒はそれだけに限らなかったようだ。

親父がポーの勤務時間管理について、詳細な書類を提出できないとなると、時間外の労働をポーに強要し、かつ、対価も支払っていないのではないかと、アリッサは決めつけ始めたのだという。

「そもそも、俺とポーしかない店で、いちいちタイムカードやらを買う必要なんかあるのかよ？　なあ、スケアクロウ、お前さんの

オフィス
ところでは、ミスタ・リードが生きてた頃、そんな事してたか？」
タイムカード
親父は憤懣やるかたない、といった調子で続ける。

ポーと親父の関係についても揉めたのだという。雇用者・被用者関係と言いつるかを、いまさらながら、アリッサが問題にしただしたのだと言つ。

そもそも、ポーは、親父の弟夫婦の妻の連れ子だ。その夫婦はとつくに亡くなっている。

だから、ポーと親父は、基本的には他人なわけだ。
ということ、そもそも、何も問題とするような関係はない。

あのデブばあのことだ、親父が、縁戚関係を利用して、補助金をかすめ取つてるとでもいいたげな口調だったのだろう。

とまあ、皆まで聞かなくても、あの「デブばあ」を目の当たりにした俺としては、『フィッシャーマンズ・ワーフ』でのアリッサの理不尽さは、どれもこれも容易に想像できた。

親父が注いでくれたコーヒーで、俺は残りのフィッシュ・サンドイツチを胃に流し込む。

付け合わせのフライドポテトの最後の1本がなくなった瞬間、ポーが俺の皿をひつたくるようになげ、キッチンへ持っていった。それと一緒に、まだ1本しか吸い殻の入っていない俺の灰皿まで、ポーは持って行ってしまった。

新しい条例の制定で、トロントの飲食店が全面禁煙になりつつあった。

現在は、かろうじてバーカウンタだけは、適用除外となっている。
いわゆる「移行措置」ってヤツだ。

ここにも、バーテンダーのいない形だけのバーカウンターがある。カウンターの脇に積み上げられた灰皿が、そこでの喫煙にお墨付きを与えている。

禁煙の適用除外条項が、的確に解釈されている。大変ありがたいことだ。

それ以前に、場末のただっ広いだけが取り柄のこの店は、いつ来たって、他にたいして客もない。俺が吸ったところで特段の支障はないだろう？ という気もしないではないのだが。

とはいえ、ずいぶん前から、この店でも各テーブルの上からは、灰皿が撤去されていた。

テーブルから追い出された灰皿達は、俺のいつも座るこのバーカウンターの左脇のトレイに積んである。この灰皿は、船の舵をかたどってある陶製だ。厚ぼったくて、どれもこれもヒビが入っている。

改めて、今日の6本目を取り出し、俺は少し俯いて火をつけた。いつ頃から使われているものなのか。

店の灰皿のほとんどどれもが、舵の突起の部分がひとつかふたつ、欠けてしまっている。

親父が、煮詰まったコーヒーを俺のカップに足す。俺は礼のかわりに軽く頷いた。

ともかく、禁煙可能というのは、このご時勢、最も評価できることだ。

……たとえば、常に煮えたぎったコーヒーが出てくるような店であってもだ。

店に入ってから3本目のたばこに火をつけ、持ってきた新聞にざっ

と目を通す。

ポーは、レジで会計をしていた。いちいち伝票をなぞって確認しながら、馬鹿丁寧にレジを打っている。

常連で事情が判っているのか、待たされている客の方も、ポーの様子に苛つくでもなく、連れと何か愉快そうに話し込んでいる。

「ひっきりなしに、よく吸うな」

カウンターの向こうで、ティッシュウオッシャーをリロードしていた親父が口を開いた。

特に、答えを要求されている感じもなかった。俺は、ちらっと親父に視線を向けただけで、ふたたび新聞に目を落とす。

「しゃべりたくないって意思表示か？」

親父は、誰に話しかけるといふこともなく続ける。

仕方なく「別に、そういうわけじゃない」と答え、俺は詰まったのを通り越し、酸味が出てきたコーヒーに口をつける。

……それどころか昔は、もっと吸ってたさ、心の中でこう付け足しながら。

「再来年までには、あれだろ。バーレストランでも、喫煙部屋みたいな作らなきゃいけないなくなるんだろ？ たしか」

俺は、親父にこう尋ねた。

再来年といえども、期間で言えば、やつとこ、あと一年の猶予だ。

「独立した換気装置」とやらを備えた隔離した喫煙席を設置できなければ、レストランは全面禁煙にせざるを得なかったはずだ。

「再来年だつて?! 再来年のことは、その時考えるさ」

そう答えながら、親父はコーヒーサーバを持ち上げて、底にわずかに残ったコーヒーを揺らしてみせた。

俺は軽く左手を振って、それを断る。

……どう考えても、あのコーヒーは飲めた代物ではなからう。
さっさとシンクに流してしまえばいいのに。

俺は、レジから戻ってきたポーに勘定書を頼んだ。

几帳面なポーの字で書かれた伝票に、十ドル札を挟む。

釣りは要らないからと何度もポーに言い含め、『フィッシャーマンズ・ワーフ』を出た。

持ってきた新聞は、ポーにやった。

十二月五日(木) (3)

14

『フィッシュヤーマンズ・ワーフ』を出た後、俺はオフィスには戻らず、パーキングの自分のフォードに乗り込んだ。

ノースウツドのオフィスは、ちょうどダウンタウンを挟んで反対側にある。

前に散々な目に遭わされた「スケートリンク」が出来かけた方の道を通るのはやめにして、湖の方からぐるりと回る事にした。

道は少し混んでいたが、まあ、想定範囲内だ。

対向車の向こうに、時折、湖面のきらめきがちらつく。

ノースウツドの駐車場はアレックスのオフィスと良く似た仕組みだ。しかし、セキュリティの性能は、こちらの方が格段に上だった。

三ヶ月ごとに更新される通行証をパーキングのバーの横のカードリーダーにスキャンさせ、母親の旧姓のイニシャルやらなんやらまで入力した上でないと、俺はここに入れて頂くことがかなわない。

車が止められるのはパーキングの来客用区画の決められた場所だけ。その上、さらに通行証をスキャンして、その区画番号をメモリさせて初めて、それを使ってエレベーターのボタンを押す事ができる。

エレベーターは、カードリーダーに通行証を差し込まなければ、1ミリたりとも動かない。

カードを差し込んでも、押せるボタンは、パーキングの階のものか、マテバの、つまり俺のやっている下請け仕事の依頼者のオフィスが

ある十一階のボタンのみだ。

グランドフロアから、何人かの社員が乗込んできた。

社員だと解る訳は、そろいもそろって、首からIDカードをぶら下げているからだ。ノースウツドの下げ紐には、すぐに剥がれ落ちてくるようなちやちなプリントじゃなくなつて焦げ茶にしゃれたロゴが刺繍してある。

金はかかっているし、なかなかセンスがいい。

マリアンヌ、とだけカードの名前が読めたストロベリーブロンドの女性は、小柄だが、美しく引き締まった足首をしていた。

残念ながら、彼女は五階で早々に降りてしまったが。

十一階まで乗っていたのは、俺一人だった。

エレベータを降りると、毛足が3センチはゆうにあるモスグリーンのカーペットが、廊下に敷き詰めてある。足音ひとつ立たない。

俺が、ノースウツドで気に入っているところを強いてあげるとすれば、このカーペットの色だ。

まあ、カーペット自体は少々毛足が長過ぎて、歩きにくいことこの上ない。

一番つきあたり、廊下の窓からシティホールの一部がちらりと見えるところまで歩く。

目の前のマホガニーの観音開きの扉を、俺はこれ見よがしに三回ノックした。

ただし、音はまったくさせずに。

古式ゆかしい扉には、超高性能カメラがついていて、中のモニターの前では、小鹿のような瞳をしたブルネットの秘書が、しっかりと俺が来たのをチェックしている訳だから、ノックなんか本当はまったく必要ないのだ。

その証拠に、ノックの手振りの後すぐ、ロックが音を立てて外れ、左側のドアが1センチほど、部屋の内側へと動いた。

俺は、磨き上げられた真鍮のドアノブを握り、ずっしりと重いドアを押し開けた。ドアがこんなに重いのは、木だけで出来ているわけじゃないから、であるう。

ドアは重みで勝手に元の場所へと戻っていき、俺の背後で、ふたたびロックのかかる音がする。

そこは、俺のフラットの1・5倍はありそうなマテバのオフィスの前室、兼、秘書室だ。

特大のガラス窓には、焦げ茶の木製のブラインドが掛かっており、目に突き刺さるばかりで空気を暖める事など少しもない冬の午後の日差しを、程よく良く遮っていた。そしてそのブラインドは、このただっ広い部屋に、少しばかりけだるげなムードを醸し出している。

俺の子ども時代のベッドぐらいありそうなデスクで、忙しそうに書類をチェックしていたマテバの秘書は、ちょうど今、俺の存在に気が付いた、とでもいうような風情で、視線だけをこちらに走らせた。

「ごきげんよう、ミスタ・シェーンバーグ、今日はミスタ・カルロにアポイントメントをお取りではないようですが？」

そういった後で、一応PCのアジエンダを検索してみせる。

相変わらず、なかなかの慇懃無礼ぶりだ。所詮は、俺とおんなじ許可証で商売して^{ノースウツド}るだけの私立探偵風情が、ここでは、そんなにもお偉いらしい。

「マテバには会う必要ない。報告書を渡しにきただけだ」

俺は秘書のキーボードを打っている両手の真上に、黄色の文書袋を差し出した。

まるで珍しい植物でも発見したように、黒目がちな瞳をしばたかせ
て、秘書は差し出した封筒を見る。

そして、左手でそれを受け取り、その予想外の重さに気が付き、す
ぐに右手も添えた。そこで俺は、封筒から完全に手を離れた。

ほんの一瞬、秘書は俺の目を見た。

そして、文書袋の紐を外すと、中身を取り出し、几帳面にデスクの
上に並べ始める。

「本来ならば、直接ミスタ・カルロに確認していただく方が良いの
ですが」

カナダ国営放送

CBCのアナウンサーが、キリンの人工哺乳が成功したニュースを
伝えるように淡々と告げながら、秘書は、内容物のメモを取り始め
た。

「移民局の申請書類の複製一式十八枚、レポート八十三枚、写真十
六枚、USBメモリ164MB1つ。以上4点ですね？」

再び顔を上げ、俺を見つめて秘書は言った。

「USBは経費にしといたから」

この豪華なオフィスで言うには、あまりにもチンケな台詞だったが、
こっちも商売だ。タダではやりたくない。

秘書は静かに頷いて、「確認の上、万が一問題がありましたら、こ
ちらからご連絡します」と続ける。

俺はドアの方へと歩きながら「万が一にも、問題はないはずだよ。

アーマンド」と言い、「この件はこれで終了だ。俺の調査費の振込
承認書は、明日マテバがサインする書類の一番上に置いておいてく
れ」と続けた。

返事の代わりに、マホガニーのドアのロックが、カチリと外れる音がした。

俺はそのまま振り返らず、部屋を出た。ドアは重みで勝手に閉まり、また、カチリと小さな音を立ててロックが掛かる。

ノースウツドのビルにエレベーターホールがいくつあるかは知らないが、少なくとも、俺が使っているのは一番南のもので、エレベーターは4機あった。

エレベーター呼び出しボタンの下にあるカードリーダーに通行証を差し、グリーンライトが点滅したのを確認して、下降ボタンを押す。瞬き1、2回ほどの時間が経った後、ごく微かに、チンという音がした。あまりにも微かすぎて、エレベーターが到着した事に気が付かないくらいの音だ。

州立図書館だって、ここまでの静寂を要求はしていないだろう。というよりも、ノースウツドには活気というものがまるでない。このことについて、俺は常々不思議に思っていた。まあローファームのような、あのハイテンションで、これ見よがしな活気にも胸焼けを覚えるものではあるのだが。

俺の通行証では、どうやったってパーキングフロアにしかたどり付かないエレベーターが、ほとんどGを感じさせないうちに、下降を停止した。

音もなく、エレベーターの扉が開く。

何はともあれ、一仕事片付いた。

俺は早速、一服しようと自分のフォードへ向かう。

当然であるが、このボロ車の仕様に、リモコンキーは無い。

運転席のドアの鍵穴に鍵を差し込み、ドアロックを外すという、古

典型的動作を行ってシートに座ると、俺は今日の7本目のタバコを取り出し、火を付けた。

吐き出した煙を通して見ているにもかかわらず、フロントウィンドーの水垢が目についた。ワイパーをかけてみたところで、かえって逆効果だろう。汚れは見えなかったことにする。

俺は、サイドを引いてアクセルを踏み込んだ。

ストリートカーの後ろで一旦停止していると、ポケットの中で携帯がバイブした。

マックスからのSMSだった。

十九時に『The Bar』で。重要情報アリ。

重要情報……。

まったく期待は出来なそうにない情報だろうとしか、予測しようがない。

だが、アレックス・ゴールドウインの件に関しては、今日は何一つ進展していないことも確かだった。

オフィスに戻ると、五時を回っていた。

朝、放りっぱなしにしていたメールの整理に手を付けることにした。通りがかりのハンバーガーショップで、テイクアウトしたコーヒールを取り出す。

頼みもしないのに、袋に入れてあった植物性油脂製のコーヒールフレッシュをペーパーカップに入れた。

時々、捨てるべきではないメールにジャンクのチェックを入れてしまったりしながら、モニターを見続ける。

三十分もすると、右腕が突っ張って、首筋が固く凝ってきた。

いくつかのメールから、必要な部分をデスクの上のメモブックに書き写す。メモは七センチ四方位の用紙が、五百枚束になっているものだ。

一段落して、モニターから目を離しながら、軽く画面をスクロールする。

一昨日の既読メールのなかに、ぽつりと未読マークが点いているのが、視野の端に入った。

俺は少々訝しんで、視線をモニターに戻す。

見知らぬアドレスだったが、ドメイン名はトロント市だ。

空けてみると、なんとアリッサ・デブばあ・ゴールドウィンからだった。

昨日の電話と同じ様な内容が、いまいち要領を得ない文章で書いてある。付け加えて、調査の進み具合にかかわらず、一週間後には報告を聞きたい、とも書かれていた。

私用の、しかも、こんなデリケートな内容のメールを、職場のメールアドレスから出してくるとは……！

職場のPCに、私立探偵風情から返事がきても、大丈夫ということなんだろうか？！

俺は相当に呆れたが、その職場のメールアドレスも一応、アドレス帳に登録しておく。そして、デスクの電話の受話器をとり、「デブばあ」の携帯に掛けた。

留守電になっている。

俺はささやかな幸福を感じ、安堵すらした。

料金を受け取ったことと、一週間目の報告をして欲しいなら、希望の日時を知らせるようメッセージを残した。

そして、PCを立ち下げながら、メモを取った用紙をブロックから剥がす。そして、白紙の部分も一枚剥がした。

引き出しを開け、カレツジノートに、今日の日付と使ったメモの枚数を記入し、引き出しを閉めて鍵をかける。溜っている新聞に気が付き、紐を取り出して縛った。

オフィスを閉めようと留守番電話をセットした時、電話のデジタル時計が、六時四十分を表示していた。

十二月五日(木) (4)

15

ちょうど帰宅ラッシュの時間に重なってしまった。

俺がThe Barに到着した時、時刻はすでに七時二十分を回っていた。

店に入り、俺の目の前に現われたのは、とてつもなく巨大な背中だった。

サックスブルーのシャツの背に、サスペンダーがくつきりとYの字を描いている。

……あのシャツを眺めるには、随分と布地が要りそうだと、俺は漠然と考えた。

その男は下半身もがっしりと肉付きが良かった。スラックスが、腿と腰にぴっちり張り付いている。

「ダークブラウン」などと曖昧に定義するよりは、「ブラック」と云い切るのがふさわしいような色をした艶のある髪は、肩くらいまでの長さがある。

それが首の付け根のところ、固くひとつに束ねてあった。

客は、まだ、彼一人のようだ。

唯一の店員であり、マスターでもあるバーテンダーが、俺に視線を向ける。

軽く頷いてマスターに挨拶すると、俺はその巨体の右側のスツールに腰掛けた。

ヤツのいかつい両肩が、両隣のスツールのスペースにまで張り出していたから、席をひとつ飛ばして座る。

スコッチのソーダ割りを注文してから、俺は左の巨体に軽く挨拶をした。

すると巨漢は、人懐っこいとしか形容のしようのないような笑みを、その浅黒い顔に浮かべた。

ふと、俺にはそれが少し奇妙に、というかアンバランスに感じられた。

なぜなら、ヤツはどう見てもファーストネイションの特徴を兼ね備えた顔立ちをしていたからだ。

ファーストネイションの表情というのは、もの静かで、時には神秘的にすら見えることもあるものだというのが、俺が彼らに抱いていた印象だった。

それに加えて、この巨体ときたら……。

体格のいいファーストネイションにも何人かは会った事があるが、ここまで、大岩のような男は初めてだ。

巨漢のビールのパイントグラスは、ほとんど空になっていた。

俺のスコッチがカウンターの上のコースターに置かれると同時に、ヤツは「もう一杯」とマスターに声を掛ける。

そして、俺の方を向き、ふたたびなつつこく笑うと「あんた常連さんか？」と訊ねてきた。

「常連、というほどのものでもないが」

俺はちよつと言い淀んでから「まあ、時々は来るかな」と答えた。

「こちらは、初めておみかけするお顔ですね」

マスターが、その男の前にビールをたつぷりと満たした新しいグラスを置きながら、バーテンダーそのものとしか言いよつのない、丁寧で抑揚のない、かといって決して無礼に響かないよう細心の注意を払った声色で訊ねた。

巨漢はといえば、何がまたそんなに嬉しいのか、目をくるくると輝かせた。

「そうなんだ。初めて来たんだ。ミリアムってコと待ち合わせでね。この店に、七時って約束なんだけど。マスター、ミリアムって知ってるかい？ オレ、店を間違えちゃったかなあ」
こう言つて、男は不安そうに腕時計に目をやった。

マスターが、一瞬、俺に視線を寄こした。
俺も同じ瞬間に、マスターを見つめていた。

……ミリアム。

隣の巨体は、俺とを交互に眺め、不思議そうな顔をしている。
と、すかさず、マスターが応じる。

「はい、存じております。当店のオーナーで」

それを聞くと巨漢は、両手を広げ、声を張り上げて言った。

「これは驚いたね！ 『オーナー』とは。まったく、あのコがねえ、恐れ入ったよ」

マスターは、男への返事の代わりに目を伏せると、グラスナフキンを手に取り、タンブラーを磨き始めた。

俺は、氷が溶けて少し薄くなってきたスコッチ・アンド・ソーダを二、三口、飲み下す。

その時、ドアが派手に開く音とともに、怪鳥のおらびのようなマックスの声が、店中にこだました。

「やだあ、ラリーちゃん、ごめん。遅くなっちゃったあ」

ピンヒールの靴音を耳障りに響かせ、マックスはバーカウンターに急ぎ足でやってくると、巨体の肩に手を回す。

そして、甘え声で「待ったあ？」と言いながら、ヤツにしなだれかかった。

耳元で冷蔵庫を開けられたとするなら、きつとこんな心持ちがするだろうと思うような悪寒が、俺の背中を走る。

だが、巨漢にとっては、そんなマックスのおぞましい態度などで、まるで恐怖に値しないようだった。

ヤツは明るい笑い声を立て、マックスの肩を幾度も叩きながら、「大丈夫、大丈夫。女の子っていうのは、色々あるからな、だいたい約束の時間よりも遅くなるものって、相場が決まってるもんだ」などと云っている。

マックスは、巨漢を挟んで俺とは逆側のスツールに座った。

マスターは、マックスが何も言う前から、すでにシェーカーのクラッシュドアイスの上に、ピンク・ジンをたっぷり注いでいた。

俺はとつとと部屋に帰る事にして、空になったスコッチ・アンド・ソーダのグラスをコースターに戻した。

財布から札を一枚引き抜き、コースターの下に挟む。

俺が席をたった瞬間、今初めて気が付いたとでもいうように、マックスは巨漢の陰から顔を出した。

「あら、スケアクロウ、来てたの？」

もとより俺は、マックスの馬鹿げた挑発に乗る気力も体力も、ついでに興味もない。

マックスを完全に無視して、ドアへと向かう。

すると、「あ、ちょっと、ちょっと」と言いながら、マックスが慌ててスツールから立ち上がる。

「ねえ、情報あげるって言ったでしょ？ メッセージ読んだ？」

読んだからわざわざ来てるんだろうが？ この色惚け！ と心の中で悪態をつきながら、俺はゆっくりとマックスを振り返る。

すると、巨漢が、合点がいったとでもいうように「、三度大きく頷きながら言った。

「やっぱり、あんた、ミリアムと知り合いだったのか」

マックスを、完全に視界から排除した上で、俺は巨漢に向かって答えた。

「いいや、ミリアムなんて知らんね。そいつはマクシミリアンだ。ついでに言っと『女』でも『コ』^娘でもないと思うがな」

マックスは、口に手を当てながら、んま、陰険、と小声でなじる。巨漢は取りなすように立ち上がった。

そして、両手を伸ばすと俺の肩を叩いて、「まあまあ、座ろうぜ」と言っ、また笑った。

「なあミリアム、ちゃんと紹介してくれよ？」

「ホント！ この人って、暗くて陰険なゲイ差別主義者なのよ」
マックスは怒り収まらずといった具合で金切り声をあげる。「あたしのこと、絶対『ミリアム』って呼ばないんだから！」

「別に、ゲイ一般を嫌ってるわけじゃない」
俺は淡々と答える。単に、お前のことが好きじゃないだけだ。

仕方なしに、俺はまた元の席に戻った。

俺がスコッチのロックをダブルで注文し終わるのを待って、隣の巨漢が右手を差し出してきた。

「オレはラリー。ラリー・ページだ。あんた、スケアクロウっていうのか、名前？ それ本名かよ」

積みレンガ位の大きさがありそうなその右手を握り返しながら、俺は答えた。

「みんな、そう呼ぶ」

ラリーは名前の理由を知りたがったが、俺はこう答えるしかなかった。^{理由}わけなんか特にない、と。

マックスはといえば、俺とラリーを引き合わせることもしないで、マティーニを飲んでいる。

俺はたまりかねてマックスを睨み付けた。

「で、その、情報とこちらのミスタ・ページと、なんか関係があるのか？」

「おっと、オレのことは『ラリー』でいい、スケアクロウ」巨漢がすかさず言う。

マックスは、ブラックオリブを嚼みながら「関係？ 別にないわ」と面倒くさそうに答えた。

……なんで関係ない奴を、こういう場に連れてくるんだ。

「ラリーとは、チャーチストリート界隈の『聞込み』中であつたの、

いい人なのよ、意気投合しちゃった。そうよね？」

ラリーは嬉しそうにマックスに頷いてみせる。

そして、俺の方を向くなり「あんた、ミリアムの恋人かい？」と心配げに訊ねた。

マスターのアイスピックを持つ手が、ほんの一瞬だけ止まる。

しばしの思考停止の後、俺の頭の中は沸騰状態となった。

だが、俺は……。

俺は、ただ沈黙した。

ラリーの問いに否定の言葉を返すことでさえ、俺の自尊心に深刻かつ重大な影響を与えかねない。

いや。そもそも、そんな事に自分の貴重なエネルギーを使いたくなかった。

だいたい、俺が激しく否定すればするほど、マックスは喜びのおらび声を上げるであろう……。

マスターが氷を砕く音だけが、店に響く。

無言の俺から発せられる荒れ狂うオーラを感じたのか？ さすがにラリーも、俺とマスターとマックスを順に見つめながら「違う……ようだな？」と確認するように口にした。

「なら良かった。いや、オレなんか誘ったりしてさ。あんたが、もしミリアムの彼氏なら、焼きもち焼いてるかもしれないと思っただよ。心配することなかったな」

そしてラリーは、その巨体に大層ふさわしい音量の大声で笑い始めた。

俺はひたすら、心を平静に保つことを試みる。そして、極力声を押し殺し、マックスに訊いた。

「……で、情報って？ 何なんだ」

マックスは俺の横に席を移すでもなく、ラリーの巨体の横から頭だけ出して答えた。

「例のね、はげデブおやじのこと。アレックス・ゴールドウィン」

あまりにも無頓着な発言だった。

マックスが部外者の前でアレックスの名前を出したことに、正直、俺はむっとした。

……本当に。こういう歳のいったドラッグクイーンって奴は、往々にしてデリカシーってものに欠ける。

「おい、べらべらと名前を喋るな」

いまさら遅いが、俺はマックスに釘をさす。

マックスは、四杯目のマティーニに口を付けながら、眉をひそめて俺を睨み返した。

「え？ 別にいいじゃないのよ、なんだっていうの？」

すると、俺たちの間に座を占めているラリーが、またもたマックスの肩を叩き、宥めるように言った。

「ほら、万一にでも知り合いの耳にでも入ったら、な？ ミリアム、スケアクロウがアレックスを調べてるって事が、本人にばれっちなうかもしれないだろ？」

………というか。

もう、あっという間にこいつには、完全にばれちゃったわけじゃな

いか？！

俺は思わず溜息をつき、両の掌で顔をこすった。

「なるほどなあ、ミリアム。お前さんそれで。バーで他人様の色恋の噂やなんかに首を突っ込んでたんだな？」

ラリーの方も、また新しいビールのグラスをマスターから受け取りながら、マックスに語りかける。

と、マックスは俺にいやっいたらしい流し目をくれながら、ラリーのエアーズロックのような肩にしなだれかかった。

「そうなのよお。ラリーちゃん、あたしがこんなに、一所懸命調べてあげたっていうのに。この人のこの態度ってなに？　って思わない？」

……別に、あちこちを嗅ぎ回ってくれとまで頼んだ覚えはないのだが。

拳げ句の果てに、だれかれ構わず、俺がアレックスに目を付けているってことを触れ回っちまったって結果だ。

「ミスタ・ラリー・ペイジ」

俺は呼びかけた。もうやけくそだ。

「あんた、ひよっとしてミスタ・ゴールドウインの知り合いか？」

ラリーは、俺の方を向くと、手を頭にやった。

「いやね。知り合いってもんでもないんだが。実は、ちょっと仕事でかかわり合ってたな」

「やだ、ホント？　ラリーちゃん、それ」

マックスが、オリープのピックを持ったまま、目を丸くする。

……だから言わんこっちゃない。

この仕事は、もうこれまでだ。
まあ、別にかまわないさ。「デブばばあ」から振り込まれた金を、
そっくりそのまま返せばいい。幾ばくかのガソリン代と脂っこいブ
ルーベリーマフィン代を損したただけだ。

そんな風に、自分で自分を慰めながら、俺はふと重大なことに気付
いた。

バイブー！！ アンリに渡したんだっただけ……！！

俺の呟きはごく小声にすぎなかったが、どうやら、マスターだけは、
それを聞き逃さなかったようだった。

ラリーが、俺の顔を覗き込む。

「心配すんなよ、探偵さん？ オレはなんにも言わないからさ。ゴ
ールドウィンは、そんなに重要な仕事相手じゃないし。今後はたい
した関わりもあるまいよ」

あら、そうなの？ よかったあ、とマックスはごく簡単に安心して
いる。

「あんたの仕事の邪魔はしないから、な？」

朗らかそのもの、といった笑顔を浮かべ、ラリーは俺に、こつ念を
押し付けた。

「おい、ちょっと待て。あんた……ラリー、なんで俺が『探偵』だ
と？」

「ああ、それはミリアムが」

……なに?!

「ミリアムがさ、『今晚はなじみのバーで知り合いの私立探偵とも待ち合わせてる』って言ってたから」

ラリーは、バーベキューの炭が、丁度良い火加減になったところだとしてもいうような口調だった。

ああ……。

こんなおしゃべりクイアオカマに、自分の仕事のことなど話したのが、すべての間違いの元だったんだ……。そう、自業自得だ。

俺はとことんまでに、自虐的な気分になった。

「それで、デブはげおやじのことなんだけどね」

これまでの文脈など、まったく存在しなかったかのように、マックスが喋り始めた。

その手には、五杯目だか六杯目だかのマティーニのグラスが握られている。

俺は、もうマックスにとやかく言うことは諦めた。

「この前、話したでしょう、ヤツの評判の悪いご乱交については？」

マックスへの返事の代わりに、俺はスコッチのタンブラーを持ち上げ、中の小さくなった氷を回した。スコッチは、ほとんど水のようになっている。

「でも、ここ数ヶ月はその手の噂も、あまりないって。まあ、この間みたいなの？ ポーイハントの真似事みたいなことは、相変わらずやってるみたいなんだけど。あんまり本気で食いついていかないっというの？ そんな調子らしいのよね」

食いついていかないっていうの？
と、俺に問いかけられても……。

「でね。あのデブはげ、最近『マーロウの店』の常連になってるらしいのよね」

「『マーロウの店』って何だ？ ミリアム」
隣のラリー・ページがささず訊ねる。

……おや？ こいつは「^{ラリー}その筋」ってわけじゃないのか。

「ああ。いわゆる、あれよ。商売小屋^{男娼}。かなり高級なヤツだけどね」

「そいつは、ジャービスに近い路地にある店か？ 玄関に黄色い日除けのついた」

ラリーの巨体の脇から顔だけを出して、俺はマックスに聞いた。

「そうそう。それよ、なあんだ？ スケアクロウ。あんだ、意外と『その筋』に詳しいじゃないの」
マックスは、嬉しそうにニヤついてみせる。

いや、単に、アレックスを尾行をしたから知っただけで……。

もはや、マックスに何事かを言いかえすような気には、到底なれなかつた。

だが、ラリーにまでも「すごいな」とでも言いたげな顔で頷かれているのには、なんとなく腹立たしい。

だいたい、マックスにハントされ、^{The Bar}こんなところまで、のこのこ付いてくるくるようなヤツに、「その筋」とやらに関係すること、

感心されたくはない。

マスターが、頼みもしないスコッチを、今度はストレートでよこした。

さつき俺がタンブラーを回したのを、飲み物の催促とでも思ったのだろうか？

そして、これまた頼みもしないのに、チェイサーに小さなペリエの瓶と氷入りのグラスを並べてくれた。

俺はペリエのスクリューキャップを開け、瓶から直接、一口飲む。

「スコッチを飲むにしたってねえ。チェイサーをビールにするくらいはタフさつてもんがないの？ スケアクロウ、あんたは」

俺の酒の飲み方には、何事においてもケチをつけずにはいられないマックスが、顔の半分だけを器用にしかめながら言った。

ペリエを飲み干し、「そういうのは、二十一で卒業したから」と俺は言い返す。

ワイスキー・ビール
実際、アレは効く。

……かなり効く。

俺たちのやりとりを聞きながら、ラリーは何が楽しいのか、さも嬉しそうに笑っている。

そして、自分のビールのグラスを俺の手に握らせ、またもや、俺の肩を叩いてみせた。

……こいつは。

話をまとも聞いてないのか？ 高度な嫌みなのか？ 単に何も解っていないだけなのか？ それとも……？

俺は自分のストレートのスコッチを、ビールグラスの中に全部注いだ。

そして、微笑みながらヤツの肩を叩き返し、ラリーの手に、そのグラスを握らせる。

「ペリエを。もうひとつ」

俺はマスターに声を掛けてから、マックスの方を向いた。

「それで？ その「マーロウの店」の常連になったから、アレックスのボーイハントが下火になった、というのが、俺にくれようとした『重要』な情報というわけか？」

「うん。でもね、それだけじゃないのよ」

マックスはもつたいぶつて続ける。

どうせ大した話じゃないに決まってるが。

「『マーロウの店』にも、そんなに通いまくってるわけでもないみたい。だからね、あのじじいには、ステディが出来たんだと思うのよね、多分。ううん、絶対よ」

マックスは、自信満々といったようすで締めくくった。

俺は、新しいペリエのキャップを開けながら、極力淡々と言った。

「で？ そのステディって、誰だ。なんか証拠とか、証言でも？」

「そんなの知らないわよ。ちょっと！ それを調べるのがあんたの仕事なんですよ?!」

マックスは、とさかのような前髪が、さらに逆立ちそうなぐらい眉を吊り上げ、俺に怒鳴り返した。

だから……。

アレックスに恋人がいそうだってことは、もう依頼人の妻の方でも疑ってるんだって……。それが誰かってところが、今は問題なんだろう？！

このオカマ野郎の脳みそ、アルコールでジャブジャブになってやがる。

「なあ、スケアクロウ。お前さんも解ってるとは思うがな。女の勘っていうのは、なかなか侮れないものなんだぜ」

ラリーがいつの間にもやら話に入ってきて、したり顔で頷く。ヤツは、俺が二ショット分のスコッチを注いでやったピールのグラスを、もうあらかた空にしていた。

そう、だからな、その「女の勘」とやらが元で、そもそもこの仕事俺に来てるんだって言うんだよ。ああ、もう、まったくどいつもこいつも……。

「ラリー。お前こそ一体、何が目的で、こんなところまでやって来たんだ？」

俺はちよつとばかり凄みをきかせてみることにした。

だが、ラリーは、俺の声色の变化など一顧だにせず、上機嫌の懐っこい笑みを浮かべている。

そして、さも嬉しそうにマスターから新しいビールのグラスを受け取った。そいつが、スコッチ入りかどうかはさだかではなかった。

「オレか？ うん、だから、オレはチャーチ界隈のバーで飲んでてさ、ミリアムと知り合ったんだ。あれは……どこの店だったっけな？ ミリアム」

「じゃあ、お前さんは『アレックス・ゴールドウィンの噂をかき回っているドラッグクイーン』と、『偶然』バーで知り合いになった

『アレックスの知り合い』だっていうわけか？」
俺は吐き捨てるように言ってる。

すると、ラリーは一瞬、目を見開いて、なんとというか……そう、悲しそうな子犬のような眼をしてみせた。

そして、さも心外であるという声を出す。

「いやいや、知り合いなんて。言葉が悪かったな？ ゴールドウィンは互いに見知ってるんじゃないんだ。オレが一方的に知ってるっただけで。ほんと」

「ちょっと！ スケアクロウ。ラリーちゃんに言いがかり付けないよね。ラリーちゃんはね。あんな、はげデブおやじとは無関係なんだから」

かなり呂律の回らぬ口調で、マックスが俺にくっついてかかる。

オリーブのピックアップが、どれだけマックスの前に並んでいるのかは、こちら側からは見えない。しかし、ヤツの言っている事は、もはや支離滅裂だった。

「で、ラリー。結局お前は、アレックス・ゴールドウィンと、どういう『知り合い』なんだ？」

俺は、重ねてラリーを問い詰めた。マックスを無視するのは、俺の得意技のひとつだ。

ラリーは軽く溜息をつくと、首を左右に振りながら答えた。

「仕事の関係でな。アレックスの会社の事業内容が被っていてね。手広くやってるだろう？ やっこさん。まあそれで、オレの方としては、少々ヤツの動向を注視してるってわけなんだよ」

そして、「あ、別にオレは探偵じゃないからな」と笑顔を浮かべて念を押した。

……なかなかどうして、取りつくシマがないじゃないか？

その後のカウンターでは、オカマと巨漢との、とりとめもない世間話とセツクス・トークが延々と続いた。

突然、モノ凄いい音を立てて、ラリーがカウンターテーブルに突っ伏した。

そしてそのまま、ヤツは微動だにしなくなった。

どうやら、ラリーのビールは、途中からデフォルトで「スコッチ入り」となっていたようだ。

マックスはといえば、いつの間にかテーブルの上に投げ出した自分の腕に頭を埋めている。

マクシミリアンのマティーニをシェイクし続けて、相当体力を消耗したに違いないマスターの顔にも、疲れの色が濃くなっていた。

俺が勘定を頼んで席を立とうとした時だった。

寝ていたはずのマックスが顔を上げると、アルコールでかすれた声で叫んだ。

「ちよつと！ スケアクロウ、白状ね。ラリーちゃんを置いて自分だけ帰るつもり？」

マックスの身勝手さは重々承知している。

だが、夜中の二時、三時に、こいつのワガママに付き合ってやるよ
うな義理は、俺にはない。

「そいつはお前の連れだろうが？ 俺には関係ない」
溜息まじりながらも、俺はきっぱりと言ってやった。

「ラリーちゃん、うちに泊めてあげようと思って」

マックスは、ずるずると上半身を起こすと、バッグからコンパクトを取り出し、前髪をひねくり回しながら言う。

「勝手に泊めればいいさ？ お前の部屋だ」

俺は釣りの中からマスターにチップを渡して、歩き出した。

と、マックスは、さっきまで酔っぱらっていたとは思えないような素早い身のこなしで立ち上がり、すかさず俺の袖を掴むと、眼光も鋭く詰め寄った。

「アタシひとりで、ラリーちゃん運べるわけないじゃない。どうせ一緒のところに帰るんだから、乗せてってよね！」

というか……。それが人に物を頼む態度なのだろうか？

俺はさすがにムツとする。

その時、ふとマスターと視線が合った。

俺がマックスとラリーを置いていけば、こいつらの面倒を見るのはマスターになるだろう。

タクシーを呼んだってこの時間、いつ来ることやら分ったものではない。

結局、店を閉める前か、閉めてからか……。マスターがこいつらを送らざるを得なくなる。

マックスがマスターに、どれくらい給金を支払っているのかは知らない。

だが、初老といっても良いような年齢のバーテンダーに、真夜中過ぎ、そんな余計な仕事をさせるというのも、さすがに少々、気の毒だという心持ちがした。

「スケアクロウ、あんたどうせ車でしょ？ 水しか飲んでなかった

から、判ってるのよ」

マックスは、すっかり俺をタクシー代わりにするつもりらしい。

「どこに止めてあるの？ 車」

俺は諦めて溜息をついた。

「十メートルくらい向こうだ」

こう答えると、軽く口を曲げ、マスターに視線を投げる。

マスターは、モールス信号のような視線を俺に返した。

恩にきります、と。

マックスとマスターに両脇を支えさせ、ラリーを立たせる。

俺は車をバーのドアぎりぎりまで持ってきた。

三人掛かりで、俺のフォードの後部座席に巨漢を押し込める。

ファクティバのサスペンションが軋む悲鳴のような音が、痛いほど俺の胸に、いや耳に響く。

俺はドアからはみ出したラリーの右足を曲げて中に押し込む。

ふと、ラリーのベルトにある奇妙な『擦れ』に気が付いた。

ラリーがサスペンダーとベルトの両方を身につけていることについては、最初から俺は少々気に障っていた。本来、ファクションの流儀として、両者は同時に身につけるべきものではないのだから。まあいい、そんなのは細かい話だ……。

マックスはといえば、さつさと助手席に乗込んでいる。

俺が、やっとの事でラリーの巨体を車に押し込め終わるやいなや、マックスが、こうわめき散らした。

「もう！ ホントせまこしい車ね！ ちょっと。寒いから早くエンジンかけてよ、スケアクロウ！」

もう溜息も出やしなかった。

俺は運転席に乗込み、イグニッションを回す。

なんと帳尻の合わない一日が、やっと終わるうとしていた。

十二月六日(金) (1)

16

時計のアラームを止めようと手を伸ばした時、肘と手首に痛みが走った。

ベッドに入ってから、正味二時間と少々といったところだった。俺としては、「朝」というより「夜中」の気分だ。

ラリーの巨体を車から降ろし、マックスの部屋に放り込むのには、ヤツを車に詰め込むのと同じくらい、いや、それ以上に苦勞させられた。

もうしばらくすれば、腕どころか、体のあちこちが痛んでくるに違いない。

マックスがラリーを部屋に連れ込んで、「何」をさせるつもりだったのかは、俺の知ったことではない。

だが、何にせよ、あれでは、ラリーのヤツが、もはやいかなる「モノの役」にも立たないに違いないことは明白だった。

そうは言ったところで、あいつらはこんな朝っぱらから、目覚まし時計に叩き起こされていない事だけは確かであろう……俺のように

は。ソーシャルワーカーという肩書きのある「トド」の依頼で、ハゲの文房具屋の夫と巨大なペニス模型に関する調査をするハメになっているのは、しがない探偵である俺だけなわけだ。

痛む腕を庇いながら、ベッドに潜ったまま腕を伸ばし、椅子にかけ

であるセーターを取った。

セーターは酒臭かった。昨日着ていたやつだ。

ベッドに入ったまま、とりあえずそれを着込む。それから毛布を体に巻き付け、転がるように起き上がって、俺は床に足を踏み出した。

裸足の足の裏に、床から冷気が滲みてくる。

俺は背中が栗立つのを感じた。

帰ってきた時は、ヒーターはなんとか動いていたはずだったが……。この冷え込みようからすると、俺が眠ると同時くらいに活動を停止したに違いない。糞忌々しいヒーターだ。

クローゼットから衣類一式を取り出し、大急ぎで着た。右の太腿にうつすらと痣が出来ている。

洗面所に湯を張りながら、また、剃刀を買って帰るのを忘れたことに気が付いた。もう悪態をつく元気もない。

少し寝過ぎしてしまったから、今すぐにでも家を出るべき時間だった。どうせ髭を剃る時間はない。

ということは、紅茶一杯、飲む暇すらないということだ。

俺は玄関の鍵を掛けながら、ティーバッグの箱の中も、昨日で空になっていたことを思い出した。

アレックスの自宅までの道順は、すでに体が覚え込み始めていた。寝不足で朦朧としながらも、気が付くと、俺の車はエグリントンの小径に、すんなりと到着していた。

しかし、いつもの時間になっても、アレックスがジョギングをするため、出てくる様子がなかった。

三本目のタバコに火をつけながら、屋敷の玄関を眺める。

アイドリングをする訳にもいかないから、車の中が次第に冷えてきている。それにもかかわらず、俺は眠気を追い払うのが、次第に困難になってきた。

と、アレックスの車庫のシャッターが上がる音がした。

銀色のメルセデスが車庫から躍り出る。

時計を確かめると、出勤するに足るは、まだ少々早い時刻だった。ベンツのエンジン音が遠のき、聞こえなくなつてから、さらに少し間を置き、俺はフォードのエンジンをかけた。

そして、今朝はさらに意外な展開が待っていた。

いつも北へと上るはずアレックスの車が、東へと直進して行くのだ。

平常時であつても、まあ明晰とは言いかねる俺の鈍い頭は、寝不足の今朝、いつも以上に混濁している。

それでも考えを巡らせ、俺はやっと気が付いた。

ヤツはハイウェイに出るつもりだと……。

アレックスのベンツは、インターチェンジからQEWに入ると、南下を始めた。

ベンツSクラスと、廃車寸前のフォード・ファクティバ。

勝負は見えている。当然尾行どころでないだろう。

アレックスは、気持ちよく飛ばし始めた。俺だってベンツに乗っていれば、当然そうするに違いなかった。

ほどなく、オンタリオ湖の水面が見え始める。

俺はガス・メーターに眼をやった。そして、携帯を取り出し、アリスァーデブばあ・ゴールドウィンのモヴァの番号を呼び出して、通話ボタンを押す。

たっぷり、五コールの後、こんな朝早くに、一体誰？　と言わんばかりの金切り声でアリッサが電話に出た。

「リード・アンド・アソシエイツ事務所のラース・シェーンバーグです」

俺も負けじと声を張り上げる。アレックスのベンツとの間には、見る間に距離が広がっていく。

「ああ、あなたね、ちょっと？　鑑定の方は、どうなってるの?!」

……今は鑑定の話などしている場合ではないのだが、多分、アリッサに説明しても無駄だろう。

その件はしかるべきラボに依頼した旨を急いで告げると、なるべくデブばあに口を挟ませないように、俺は早口でまくしたてた。

「ご主人の車は、今、高速OWに乗っています。これは予定の行動ですか？　それとも？」

デブばあは、それがどうしたと言わんばかりに、俺に答える。

「ああ、今日一日バッファローに行くって言ってたわ。仕事でね」

「それは、前もって解っていた予定ですか？」

俺は、沸々とこみ上げてくる怒りを抑えながら訊ねる。

「昨夜聞いたのよ。最近、金曜日はバッファローに行く事があるわ、そういえば」

なぜ……。

なぜそんな重要な事を。依頼に来た時に、思いつかない?!

「そういう予定があると解っている場合は、前もってお知らせ願えますかね」

俺は堪えきれず、かなり厭味な口調になる。

そして、ヒステリックに何事かを言い返そうとするアリッサを押さえ、俺は続けた。

「グランド・トロントから離れる場合、特に州外に出る場合には、料金を加算しますよ。経費も嵩みますが、いいですね？」

デブばばあは、一瞬にして押し黙った。

「尾行、続けますか？」

俺は、今一度、念押しする。

デブばばあは何事か悪態をつきながらも、続けてちようだいと吐き捨てた。

何も見つけられなかったら、ただじゃ置かないからと、俺に恫喝するの、勿論、忘れてはいなかった。

ああ、まったく。バッファロー、バッファローって言ったよな？

果して、バッファローまで、このペースで、俺の車のガソリンが持つだろうか。

アレックスの車は、とうに俺の視界から消えていた。

だが、とりあえず車線をキープして、ナイアガラの方へと向かう。

しかし、どれだけ、俺がアクセルを踏み込んでも時速百二十キロ少々ってところが、この車の限界だ。

アレックスのベンツに追いつくのは、絶望的だと思われた。

溜息をついた瞬間、俺は周囲の車の流れの異変に気が付いた。スピードを落とし始めている。

バンパーのひしゃげた白いトヨタが、緩衝地帯に乗り上げていた。ハイウェイ・パトロールの警告灯がちらついている。

ほどなく、俺の視線は、数百メートル先にいるアレックスの銀のベントンを捉えた。

……ラッキーというべきなのか何なのか。

そう言えば、こいつの尾行は、まるきり運任せだった、はじめっから、

とうとうピースブリッジに差し掛かった。

俺は手探りで財布を取り出す。

だが、運転免許が見当たらない。考えられない事態だ。

自分自身に落ち着くよう言い聞かせる。脇に嫌な汗が滲むのを感じた。

目の前に国境ゲートが見えてくる。

あえて言葉にして表現するなら、俺は泣きたい気分になった。

アレックスのベントンは、一旦停止の後に、すんなりとカナダの税関ゲートをくぐっていく。

落ち着いて考えよう。最後に運転免許証を取り出したのはいつだったか。

まず、思い出すのは移民局だ。書類の申請の時。

あの時はたしか、財布から取り出し、いつもの所に戻したはず。その後……。

係員が、近付いてきて運転席のサイドウィンドウを軽くノックする。

俺は窓を降ろして、まずは愛想良く微笑んでみせた。

そして、州の探偵業ライセンスを取り出した。

「ちよつと運転免許証が出てこなくてね」

まだ若い、感じの良さそうな係官は　カナダ側は大抵、感じがいいことが多いが　俺の身分証を手にとると首をかしげみせた

「へえ探偵、ね。あんた私立探偵なのか？　オレ初めてみたよ、こんなの持ってるんだ」

俺は引き続き、運転免許証のありかを考え続けていた。

だが、係員はこう続ける。

「このライセンスでゲート通していいかどうか、自信ないんだけどさ、オフィスに確認取ってきていいかな？　悪いけど、この車あっちに回して、あんた降りてきて」

せつかくアレックスに追いついたというのに、ここで足止めとは。車を降りて、運転席のドアを思い切り叩き付た瞬間、ある場面がフラッシュバックした。

移民局で使って、その後……。

俺は上着のポケットから運転免許証を取り出し、さっきの男を追いかけて建物に入る。

係員は免許証を一瞥しただけで、手にも取らず笑顔で頷いた。

「よかったな、見付かって。警察やなんかに止められた時、運転免許証持ってないっていうのは、まずいからね」

俺は、そのまま車に戻りかけたが、探偵業ライセンス証明を係員に渡したままだったことに気が付く。

「さっきの……」

「ああ、あれね？ 探偵のヤツ」

係員は嬉しそうに大声で言うと、デスクに座っている職員に声をかける。

「どうやら、そいつの元にはないようだった。」

そしてそいつは、別の職員にまた、同じ事を問いかける。

俺のライセンスは、オフィス中の人間に回覧されていたようだった。

アレックスに追いつくことを、もはや半ば諦めながら車に戻る。

あるべき物があるべきところへ戻していなかった自分が悪いのだから、仕方あるまい。しかし、こんなミスは痛恨だ。

……そもそも、この依頼は、最初から調子が狂いつぱなしかったんだ。

運転免許証を身分証を、それぞれ収めるべきべきところに収め、俺はエンジンをかけた。

ブリッジを渡り、アメリカ側の入国ゲートをすんなりと通過する。

スピードを上げ、何台か追い越してみるが、銀のベンツの車体のきらきらとした輝きは、もう見付からなかった。

さあ、この後どうしたものか……。俺は考えをめぐらせる。

アレックスを見失ったままになる可能性は高そうだ。

ふと、胃の当たりが締め付けられるような感覚がする。

朝からタバコの煙以外は、まだ何一つ口に入れていなかったことに気がついた。

まず、俺は眼に留まったガソリンスタンドで、ガソリンを補充することにする。車へのエネルギー補給の方が、かなり切羽詰まった問題だったからだ。

どうせデブばあに請求する経費とはいえ、こっちでいれると、やはり、大分安くあがる。^{ステイッ}

それから、隣にあったコーヒーショップに入り、俺は自分にもカフェインとエネルギーを補給することにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7636x/>

勇者はいつも竜を殺す

2012年1月13日08時52分発行